
お人よしな吸血鬼

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お人よしな吸血鬼

【Zコード】

Z7582U

【作者名】

雨月

【あらすじ】

NKK（日本吸血鬼協会）から派遣された吸血鬼、彼の名前は大仁義人である。義人は羽津町を恐怖のすんどこに陥れている吸血鬼を捕縛するのが彼の任務である。

第一話

第一話

日本吸血鬼協会。略してNKK……惜しい、實に惜しい。Nと最後のKの間がエツチ……いや、エイチだったら何となくよかつたんだけどな。

ともかく、俺はこのNKKに呼び出された。なぜか、それは俺が吸血鬼だからである。残念ながら、横文字のかっこいい名前ではない。

大仁義人、すつごく日本人臭い名前だらう。

「親父、今日から高校二年生なんだぜ……早速サボりつてちょっと気が引けるだろ」

「吸血鬼の事情だ。まず、親父ではなくパパと呼べ、パパと。親父なんて昭和レベルの呼び方だらう」

親父の名前は大仁正弘……外国行つたときは無理してマーロ四世とか名乗つてゐるそうだ……ドラキュラにあこがれてゐるそうで自宅（日本家屋ね）でもマント着用、風呂上がりはバスローブと言うちぐはぐ感いつぱいの事をやつてゐる。顔立ちもほつそりとしておらず、縄文系の四角い顔である。

「それで親父、わざわざ此処に呼び出したのはどういつた理由だよ」

NKKの理事をしている俺の親父。昼間に行動してゐる事は少なく、人が寝静まつた時に行動してゐる為、近所の人たちからは無職と思われてゐる。さらには妻の保険金で生活してゐると勘違いまでされているという可哀想な親父である。

「実は羽津町というところで吸血鬼関連の事件が起こつてゐるそ

だ。発見次第拘束し、協会に登録させるか消滅せろ」

親父、そして大体の日本人吸血鬼が所属しているNKK。これは日本籍の吸血鬼が作りだしたものだそうで、日本の吸血鬼の管理、貧血対策、健康管理、他様々な事を取り仕切つている。

もちろん、これら協会は勝手にやつてている為に知らないと言つ吸血鬼もたまにはいる。そういう場合は極力協会に入るよう促すわけだ。まあ、残念ながら好き放題人間の血を飲んでいるアホな吸血鬼には制裁が下される。青空駐車している人だつてずっと放置されているわけじゃないからな……警察に電話してやつたことも何回かあるけど、放置している奴が悪い。

「俺を派遣するつてことだろ」

「そうだ」

「自分で言うのも何だけど俺、弱いぜ」

人間に比べると強い、しかし、相手が吸血鬼だつたらそこまで強いと言うわけではない。

「パパがお前の歳の頃には一匹狼で教会の討伐部隊を返り討ちにしていたぞ」

「あの頃は幕府が荒れていて大変だつたな」

「……」

いつの幕府だよ。

「ともかく、お前は平和すぎる世の中に生まれてきてしまったんだ。パパもお前には平和に暮らしてもらいたいと思つてる」

「じゃあこのまま生活させてくれよ」

「しかしな、世の中にはやりたくないからやらないとか通じない事があるんだぞ。これもその一つ。お前は吸血鬼としてルールを破る仲間を戒めなければならない。腕つ節でなくてもいい、説得してくれるだけでもいいのだ」

正論である。悪い事をした者は更生の余地があるのなら更生させ、

出来ないならお仕置きが必要と言う事なのだろう。俺も一度冤罪で吸血鬼どもに「ふるぼつ」この刑を受けたものだ…。

「でも、俺、転校するってことだろ」

「そうだ」

「転校したことないから不安だ」

「何、心配するな。一人暮らしがしたいとか言つていたからちゃんとアパートを借りてやつたぞ。本当は古城がよかつたんだろうが…」「いや、日本に古城はないと思う」

あつたとしても親父が想像しているような西洋のものではなく、もののふ達が集う天守閣的なものに違いない。

「ともかくだ、明日には現地入りをしてもらう。一ヶ月に一人襲う程度でいいのに一週間二人のペースで襲われている。中には血が足りなくなつて輸血までしてもらつた人が出たそうだ」

「……わかつたよ、行くよ。行けばいいんだろう」

「そうだ、それでいい」

机の中から茶封筒が取り出される。

「何だこれ」

「協会からの正当な報酬だ。危険度低と言えど、相手は吸血鬼。襲われる可能性もある危険な仕事だ」

「でも、就職している人とかじやないとも言えないとか言つてなかつたか」

「ああ、そうだな。普通はもえないと特別だ」

俺は差し出された茶封筒を手に取り中身が気になった。

「開けても構わんぞ」

「……」

茶封筒の中身を確認すると図書券がたくさん詰まつていた。

「小学生、中学生、高校生、そして、大学生に大学院生。自分で勉強するために本が欲しくなる時もあるだろつ、高校生と言つ事ですかに現金はやめさせもらつた」

書類の入つたバインダー付きのファイル、カメラ等もついでに手

渡された。

「今日中にお世話になつた人に挨拶をしておくよ」

「わかつたよ」

「こつちでお世話になつた人なんてそれこそ小学生の頃の担任や中学生の担任、色々といふ。それに友達にも挨拶しておかないとけないのに今日中で間に合つんどうか。」

「ん、あれ、親父、現地入りつて今日の日付になつてるぞ」

現地入りスケジューるには今日の日付がしつかりと刻まれていた。
「お、そうか……じゃあ悪いな、今すぐ行つてくれ。飛んでいくなら気付かれずに飛んで行けよ。あと、日焼け止めとサングラスを忘れるな。現地についたら報告を忘れるなよ」

「……」

「ひつして俺は見ず知らずの土地に送り込まれたのであつた。」

第一話（後書き）

不定期連載です。思いついた時に投稿していくと思います。質問、意見等あればメッセージ等でお願いします。

第一話

第二話

自分が空を飛べる事に気が付いたのは何歳の頃だつただろう。物心ついた時には飛んでいたし、小さい頃から空を飛んでいた俺の事を周りは空を飛ぶ事を『ちょっとした特技』としか見ていなかつた。小学一年生の頃、何かで見た『面接の受け答え』と言う映像は今でもいい記憶だ。

「大仁さんの特技に『空を飛ぶ事』とあります、どういうことでしょうか」

「飛ぶんです」

「ほお、それはそれは……」

そんなアホらしい妄想……飛ぶ事は気持ちよかつた。たまに友人とかを背中に乗せて飛んでいたぐらいだからよほど飛ぶ事が好きだつたんだろうな。

それがある日、別に隠れて飛んでいたわけではないが飛んでいた事がばれて相当怒られた。当時の俺は納得いかなかつたから親父に何故、飛んではいけないのか尋ねた。

「それは……お前が空を飛んだら飛行機に頭をぶつけて死んでしまうかもしれないからだ」

本当は俺が空を飛ぶ事が希少種であるバンパイアハンターに知れたら大変だと思つてとつさに嘘をついたんだろう。

ただまあ、俺はバカだつた。その言葉を信じ、周りの友達にも急に飛べなくなつたと言つて色々と嘘をついた。当然、映像なんかに残つていたりする、するのだが……そちらの処分は親父がやつてくれたおかげで人々の記憶の中にしか残つていない。

空を飛びながらめつきり電柱の減つた下を眺めつつ、俺は人通りのない道へと降り立つた。

想像していたよりもちょっと田舎っぽい町の入口に降り立つて俺

は携帯電話を取り出した。県道沿いからたまに垣間見る事の出来る田んぼが田舎っぽさを引き立ててくれている。

「現代は携帯電話が普及してるけど未来じゃ何になってるんだろうな」

テレパシーだろうか。それだつたら人類皆エスパーである。エスパーと吸血鬼つて絶対にエスパーの方がすごいと思つなあ……自分があほな事をまた考えていた事にため息をつき、俺はちやつちやと携帯電話を耳にあてた。

何度かの「ホール音」の後、親父の威厳たっぷりな声が聞こえてくる。

『義人、ついたのか』

『ついた、これからどうすりやいいんだよ』

『リバーサイド満開というアパートに行つてくれ』

嫌な名前である。なんだよ、満開つて。

『そこが俺の住居になるのかよ』

『ああ、ちゃんと連絡入れたから管理人さんがまつてくれているぞ。若い人だからといって鼻の下を伸ばさないよ。幸運を祈る。これから的事はお前の独断で動いて構わない……気をつけろよ』

『……』

電話は切れ、俺の不安が少し膨らんだ。最後の気をつける、と言う言葉に不安を覚えたわけじゃない。

親父は年齢不詳だ。これがどういう事か、親父にとつて今の人たちは当然、全ての人間が若い。

若いお姉ちゃんを呼んでやつた。

そういうて俺のところにある口もつてきたのは齡八十を超えるおばあさんだった。

すつしゅく若い女の子を呼んでやつた。

そういうて俺のところにやつてきたのは四十を超えたおばはんだつた。人間、長い間生きるもんじやないなと俺は思い知らされたね、うん。年齢不詳って親父が数えるのを放棄したからそくなつただけだ。

ともかく、俺が今からすることはNKKに所属している吸血鬼の仕事である。仕事は仕事と割り切つてやるのが一番だ、私情は挟むなと俺の親父が言つていた。

「NKK理事の命令だ、義人、今晚のおかずはから揚げにしておけ」「NKK理事の命令だ。刃向かうんなら首だぞ。お前がこの前買ったアイドルの真白りつこちゃんの本をよこしなさい」

絶対に職権乱用だ。

親父にどうやって仕返ししてやろうかと考えながら歩いていると、意外と早くにリバーサイド満開なる怪しい名前の看板を見つける事が出来た。リバーサイド満開の入り口前のアスファルトの道路に立つていたのは当然ながらおばあさん。

「ああ、お前さんが正弘さんの息子さんかあ」「はは、そうです」

誰も正弘なんて名前の吸血鬼がいるとは思つまい。

「何でも、見た目はそんなに若いのに百歳は超えているとか何とか……正弘さんに聞いたよ」

「え」

たまに、いや、結構な頻度で親父は嘘をつく。人を傷つけない嘘ならないだろつ……人を混乱させる嘘は駄目だ。残念ながら俺はこの世に生を受けて今年で十七年目ぐらいだ。見た目が若くて実は年齢すごいことになつてますよとかあり得ない。

「えーと、まあ、そうなんですけど……俺の場合はずつと棺に籠つて

闇に潜んでいましたから。世間には疎いんです「

親父がＮＫＫの理事になつてから一つ決めごとが増えた。

『一つ、吸血鬼のイメージを壊さない事』

風呂上がりに麦茶を飲み干すとか絶対に言つては駄目らしい。バ
スローブをまとい、クールにワイングラスで血を飲み干すと言わ
いといけないそうだ。

「なるほど、世間知らずのお坊ちゃんといつことだね

「まあ、そんなところですよ」

納得してもらえたようでよかったです。親父が手配してくれた住みか
だろうから当然知り合いのようである。親父についての話なんて聞
きたくないのでさつさと部屋の方に案内してもらつことにした。

「此処が義人君、いや、義人さんか

「大仁でいいですよ」

「そうかい、じゃあ大仁さんの部屋だよ」

一階の角部屋。泥棒に狙われないかなとちょっと不安だ。

「部屋はきれいに使つておくれよ。もし使つてくれなかつたら一
二クと十字架を持つて襲いに行くからね」

「それは怖いですね、きつちり綺麗に使います」

親父はニンニクと十字架を異常に怖がる……ふりをしている。ニ
ンニクなんてちょっとにおうだけだし、十字架は宗教的な話だらう
よ。とりあえず、俺には関係ない。苦手なものなんて昆布くらいな
ものだ。

その後、数十分ほど『太話に付き合わされて解放された頃にはお
昼が過ぎていた。

第二話

第三話

吸血鬼は日光に弱い。何故苦手なのは吸血である俺でさえ知らん。

吸血鬼の医者が科学者に言わせると、血中に特殊な成分が何かがあるそうだ。それが日に当たると吸血鬼の身体にとつて有害な何かになつて許容範囲を超えると花坂爺さんにしてくるようなポチを燃やした後のような灰燼に帰すに違いないらしい。これ以上詳しい事は知らん、人間だつてそうだろうよ。自分の体のことなんてほとんど知らないだらうし、専門家がいないと詳しいことだつてわからないはずだ。

吸血鬼の中にも学者肌と言う人がいたそうで、日焼け止めを作る会社を設立。日夜研究を重ね、俺らにとつてその人が作つた日焼け止めは必需品となつた。

もちろん、犠牲の上に成功なんて存在しなかつたそうで肌が永久的に鳥肌になつてしまつた吸血鬼や全身の毛が常に逆立つてしまつた吸血鬼……他にも色々とやばい事になつた吸血鬼がいたらしい。ともかく、犠牲となつた吸血鬼の人たちのおかげで俺はこうやって日の下で活動できるのだ。科学つて素晴らしいね、うん。俺、理科とか嫌いだけどな。

前置きはこのぐらいにしておこう。今日やるべきことはこの町の被害者の数を改めて調べる事と、吸血鬼と思しき人物が日中も活動できるかどうかである。日焼け止めは当然ながら協会に所属している吸血鬼だけしか入手できない限定品なのだ。

「図書館だな、うん」

地方紙とかを調べるなら図書館だらう。と言つ事で、俺は図書館に向かつたわけだ……途中、警察に聞いたりしてなんとかたどりついた場所は高校だつたりする。警察で直接事件の事を聞けばいいじ

やんかと思うかもしない。いやー、ね、吸血鬼ってそういうのは苦手だつたりするんだよ。

この町の図書館は高校の敷地内に作られていたそうで校舎とは別に地上二階、地下三階に及ぶ巨大図書館だそうだ。

本好きにはたまらない場所だろうな。

中に入り、新聞の置かれている場所へと移動する。とりあえず学ランを着ていてる為に周囲の生徒に怪しまれてはいない。いや、どうやらこの高校の制服はブレザーのようだな。ちょっとだけ注目を受けてしまった。

「はつ、いかんいかん… 女の子にちよつと注目されたぐらいでぼーっとしちゃ駄目だ」

俺の事を見ている女子生徒の中に吸血鬼がいるとも限らない。調査するときは目立たないようにと誰かに教わった気がする。

新聞記事を持っていたメモ帳にまとめていく。

「……最初の被害者が襲われたのは半年前か。親父の奴、結構放置してたんだな……まあ、すぐに断定できないか。一週間に大体二人襲われてるつて結構な頻度だな……」

被害者はすべて女性。しかも、十六歳から二十歳前の若い女性だけのようだな……襲われそうになつたけど助かつた女性は若づくりをしていてぎり二十代…吸血鬼も騙されたようだし…それで襲われている時間帯は午後六時以降だな。

つまり、相手は協会にやつぱり所属しておらず、日中は襲えないつてことだ。

「うーん…後は抜き取られる血の量が多くなつているつてことか」とりすぎは体に毒である。お酒とか薬とか…あとは何があるつけ別にいいか。とりあえず、血を飲みすぎた吸血鬼はさらに血を欲するようになり最終的には自分を制御できなくなる。こうなると大変でそれが太陽さんさん降り注ぐ日中でも関係なくあほみたいに出て行く。

そうなつたらどうなるか… 苦しみながら血を求める、一滴でも血

を飲めばその瞬間にお日様に焼かれて灰になるそうだ。なんでそんなのかはいまだに解明されていないそうで、吸血鬼の数少ない学

者たちが頭を抱えている。

吸血鬼御用達の日焼け止めを塗つて拘束していた吸血鬼が逃亡、結果はやはり消滅したそうだ。どうも化学反応が起こっているみたいだねえとこの前話を聞いた。

ともかく、あまり人に迷惑をかけるのはよくないのと一応吸血鬼仲間である為、事件を起こしている吸血鬼と会つて話をしなくてはいけないだろう。まあ、話を聞いてくれない相手なら実力行使をするしかない……腕つ節には自信が無いのですぐさま逃げて救援を親父に頼む事になるだろうけどな。

「あら、あなたもしかして大仁義人君じやないかしら」「へ

振り返るとそこには教師っぽい人が立つていた。

「間違つていたらごめんなさいね、で、義人君かしら」

「え、ええ……あの、あなたは」

「私はあなたのクラスの担任なの」

「そう……なんですか」

「ええ、教科書とか持つてきてないようだけどあなたさえよければ今日のホームルームで転校生として紹介するわよ」

四月の転校生ってかなり違和感あるな。絶対何かあつただろつて勘ぐられるだろうし……いや、実際何かがあつたからこっちは転校してきたんだけどな。家庭の事情じゃなくて吸血鬼の事情つてやつですよ、奥さん。

「明日朝から来ます。今日はちょっと調べ物で図書館に来ただけですから」

「あら、そうなの。勉強好きなのね」

「いや、そうじゃないんですけどね」

先生はふと俺の握っていた新聞を覗きこんで一つの記事に目をやつた。

「……羽津吸血鬼事件の事を調べてるのね」

「そうです。ところで先生の名前は…」

「ああ、『めんね。私の名前は玉富菜穂子。私も一度だけ吸血鬼に襲われちゃったのよ』

「そりなんですか。詳しく教えてもらえますか」

「これはまたラッキーと言うか、結構襲われていると言つた事なんだろつた。

「……正確には襲われたっていうか押し倒されて、ちらりと相手は見て逃げて行つたんだけどね。吸血鬼かどうかわからなかつたけど、あつとそうに違ひないわ」

なるほど、つまり先生は若々しくして二三十代後半の被害女性のことか…。

「ところで、どうして大仁君はそんな記事を調べているのかしら。先生、手伝えることがあるなら手伝うわよ」

「あ、いえ……血が抜き取られるなんて珍しい話を引っ越してきたとき聞いたんです。それでちょっとだけ興味がわいたので調べてみただけですよ」

「そりなんの？」

「はい…あ、先生、俺、ちょっと用事ありますから今日はこれで失礼します。また改めて明日来ますんで…」

そういうて俺は逃げるという選択肢を選んだ。もちろん、新聞記事はちゃんと戻しておいたから安心して欲しい。ただ、帰る時に先生が図書館の窓から探るような目で俺の事を見ていたのが非常に気になつた。

第四話

第四話

NKKを作つた偉い吸血鬼は最初に医者方面の知り合いを募つたと言う話がある。これは怪我をした吸血鬼に処置をしたり、自分で人間から血を取るのが下手な吸血鬼の為に献血で得た血を秘密裏に回すためだと言われている。

昔の吸血鬼は十キロ先の暗闇でも見渡せるとか言っていたものだ…残念ながら、毎年の健康診断の結果最近五キロが限界になつて来たそうである。人間と共に（あくまで紛れ込んでだが）生きて来た吸血鬼も機械に頼つたりしてきている為、身体能力が以前に比べて落ちて來たらしい。

まあ、落ちたと言つてもそれなりに腕力は強いし、空だつて飛べるからまだまだ十分な力を持つていると俺は思つていて。重武装した人間相手にしても俺だつて勝てるからな。

図書館を出て俺は文字通り飛んで家に帰つた。他の人に見られないう気を付けているし、時間帯も人が少ない昼下がりだったのであつという間に家へと帰り着いた。

「ふう…」

あの先生が何者か調べたい…うん、普通に綺麗だつたし俺だつたら襲つて血を吸つていたかもしれない。ただ、こここの吸血鬼は相当なグルメらしい。普通だつたら好みじゃなかつたとしてもそのまま襲つていたはずだし、血を吸つた相手の記憶をちょっとだけ消したりする事が出来るのだ。

人はそれを特殊能力と言う。

この力は多用すると自身の寿命をすり減らしてしまつそうで現代の吸血鬼は薬で回数を制限していたりする。俺みたいな若い吸血鬼はあまり制限されていないが、老齢となると回数制限の薬が欠かせなくなつてくるらしい。

これは男の吸血鬼に多いらしい……まあ、その、同族で恥ずかしいと言うか何と言つか、自分の嫁さんに満足いかないオオカミさんがお酒の席とかで多用して過ちをしちやつた時の為に催眠術を使うそうだ。

ついでに、吸血鬼同士では子供は生まれないそうだ。片方が人間なら出来るそうで、これもまた理由がわかつてい。半分だけ人間、半分だけ吸血鬼と言つたそんな半端な存在は生まれず、一人目の赤ん坊は必ず吸血鬼として生を受ける。二人目以降は人間が生まれるそうだ。これは吸血鬼の数が人間を絶対に超えないようになっている仕組みだと何とかで、詳しい事は学者にでも聞いてほしい。それで日本の吸血鬼同士の結婚はそう多くない。男がよく浮気をするからだそうで、喧嘩をするとどちらかが土の下に行くそうである……九割、男の吸血鬼が天国に召されるそうな。

ともかく、わかる事は浮気をするのはよくないと言つ事だ。俺の親父はもう六回ぐらい死んだ母さんに刺されたそうだ。

「後にも先にも、この私をあそこまで追い詰める事が出来たのはお前のママだけだつたよ」

何故か誇らしげにそういう親父。月命日には必ず墓参りに行くぐらいだからよほど死んだ母ちゃんにぞつこんだつたようだな。

写真や映像なんかに母ちゃんは残つていないので、話でしか知る事が出来ない。親父の話によると俺の母ちゃんは美人で強くて、嫉妬深く、怒ると手がつけられないほど暴れるらしい。お隣のおばさんとちょっと話しただけでも駄目、ウェイトレスに注文するときも母ちゃんがしていたそうだ。

写真の一枚でもあるものかと思つて探してみた事もあつた。親父が持ち歩いているわけでもなく、俺が生まられてすぐの火事で家が燃

え、アルバムとかも焼失したそうだ。

「いいか、義人。美人の奥さんをもらつんだぞ。不細工は三日で慣れるとか言つてゐる奴は悔しくてそんなことを言つてゐるだけだ。一度しかない吸血鬼としての命、全うしろよ」

親父から一度だけ言われた言葉である。中学一年生の頃にその言葉を信じて可愛い子にアタックした事もあつたんだけどな。

「ごめん、大仁君はいい人だけどそんな風には見れないの」

「え、ちょ、色白で頼りなさそだから無理」

「義人君にはもつといい女の人がいるわ」

俺の場合、選ぶ権利は男じゃなくて女にあると思うだよ、親父。高校生になつてからは告白なんて一度もしていない……また、可愛い子にあつてもいな。初恋は近所のお姉さんだつたが、種付け婚……じゃなかつた、出来ちゃつた結婚で何処かに行つてしまつた事が大分トラウマになつたな。

「いいか、義人。美人の奥さんなんて怖いだけだぞ。結婚したが最後、釣り合つてないとか色々影でののしられるようになるだけだ。自分の顔を鏡で見て、しつかりと均整取れた相手を選べよ」

親父はころころと意見が変わるからな。最近はこんな事を言つているもんだから困る。これもまた、一度しか言われない言葉なのだろつ。

「今日の晩御飯は……出前かインスタントでいいか」

ぶつちやけ、人間の血を吸えば飯なんて食わなくていい。直接首筋に噛みついて……と言う方法はあるにはある。しかし、これは相手に快樂を与えるために恋人同士でやつてくれとのお達しだ。普段は相手を催眠術で眠らせて血を抜き取り、いただくと言う方法にしている。

「ともかく、暗くなつても夜道を歩いているうら若き美女の血でもいただこうかねえ」

ついでにこの町の女性を恐怖のどん底に落としこんでいる吸血鬼を見つける事が出来るかもしれないからな。

第五話

午後七時過ぎ。これからもつと明るくなつてくるんだろうな。ともかく、吸血鬼が活動するには少し早いくらいの暗さだ。足元が暗いからと言つて札束を燃やす必要性はない。

部活動を終えて生徒たちが帰路についている頃合いだろう。

目当ての女性を見つけたら後は簡単。缶を蹴飛ばすなり、指を鳴らすなりして振り向かせ、速攻で相手の目に術をかければ……はい、終了。煮るなり焼くなり好きにしろという状態になるのだ。

多用すれば自分の体調を著しく悪くするし、下手すると協会に目を付けられる。大人しく此処は血を抜き取つてから飲んだほうがいいだろう。直接血を飲むとたまに変な人間に追いかけられちまうからな。

「お、いたいだ」

俺が通う事になる高校の制服を着ている女子を上空から発見する。このまま急降下して襲つちゃつてもいいが万一と言つ事もあるだろうから背後から行かせてもらうかな。

近くの路地裏に降り、相手が一瞬のすきを見せる場所……たとえば、家の前や暗い道を抜けた街灯間近で狙えば一発である。

しかし、考えてみればこの町の女性を襲つてている吸血鬼はそのままで襲つているんだよなあ。協会の存在を知つていればばれるのが怖くて力を毎回使うだろうし、血を飲めばその分回復もするもんだ。知らないなら使わない、というわけでもない。町で一人だけ襲うのと、その場所にとどまつて毎週人を襲うのでは話が違う。警戒されるからだ。

中には鍵を開けて部屋に忍び込んで寝込みを襲うなんてのもある……しかし、こここの犯人はそれを一度もしていないから何かしらのポリシーもあるんだろう。もしかしたらNKKの事を知らないだけ

かもしだれないな、だつてローカルな組織だから。

人のおまんまの心配をしている場合ではなかつたな。うん、放つておいたらそろそろ大きな道に合流しそうだ。

俺が部活帰りと思われる女子生徒に襲いかかるうとしたその時、別の何かがその女性を背後から襲つてゐる真つ最中だつた。

「何……」

「むーつ……」

口をふさがれ、身体を動かしている少女はあまりにも無力すぎた。黒いマントで姿を隠し、ちらりと見えた顔、吸血鬼が血を吸うときにはだけ見せる深紅の瞳、そして口元には鋭い牙が一本……月明かりに照らされている。

こいつは吸血鬼に間違いないつ。

俺はさつとこんな仕事を終わらせたかつたので嬉々としてその吸血鬼に殴りかかつた。一応、両刃の剣とか家にある。そんなもの持つて血を飲みに行くバカはいない。

人間だつたら絶対に反応できないスピードで殴りかかつた。相手はすぐさま反応してあらうことか掴んでいた女の子を宙に思い切り放り投げたのだ。

ぱーんとお月さまに女子生徒が照らされたのも一瞬。すさまじい悲鳴が聞こえてきたために俺はその子を助ける為に飛んだ。どの道、女子生徒に気を取られてゐる間に相手は逃げてしまつたので助けるしかないだろう。見捨ててアスファルトが血に染まるのは気分が悪い。

「よつ……つと」

「きやああああ？」

近くの民家の屋根に降り立ち、そのままアスファルトの道へと降

り立つた。まー、空を飛んだの見られたりはしていないだろつ。空に放り投げられて何かを見る暇なんてなかつたはずだしなあ……。

「ん、どうしたの」

俺の事を熱心に見てくる。

「今、空飛んだよねつ」

いやー、あははは……見る暇ある人はあるんだな。吸血鬼の特殊能力的な何かで記憶を操作しようつか悩んだ……ただ、これを使うと前後数分の記憶が飛ぶ。眠らせたり、氣絶させたりは結構長い時間できるけど記憶は残つていいからな。選んで消せると言つわけじやない。

大体、記憶操作なんてしたらさつきの事まで忘れちゃうだろつし、もしかしたら犯人の顔を覚えていいかもしないからな。

「詳しい事は明日、この時間この場所で話す」

「あ、待つてよーつ」

一番厄介な性格の人間に目を付けられたんじやないかと思つた。あの時、記憶を消しておけばよかつたと思つたのは次の日の事であった。

第五話（後書き）

最終的に30話ぐらいでけりをつけたいと想っています。10話まではサブタイもなしですが、それ以降は一つに分けて話を進行させる予定です。

第六話

第六話

転校生がやつてくる、しかも四円にやつてくるとか狂氣の沙汰としか思えない云々……ともかく、一步遅れての友達百人できるかなー。高校一年生だから中途半端に友達で来ているだらうし、俺、大丈夫なんだろうか。

「転校生の大仁義人君です。みなさん拍手」

何故、拍手なんだろうかと思っている人なんて誰もいないだろ。朝からぼけーっと……いや、一名必死に叩いたりする人もいるけどさ。

「どうも、大仁義人です」

転校生がやつてきたのにクラスは別の話で盛り上がっていた。ひそひそと話されている事を聞こうと思えばすぐに聞ける。

「こんな時期に転校生つて珍しいよねえ」

「うん、何かの調査員だつたりするかも」

「あはは、それはないよ」

そんなひそひそ話。彼女たちが眞実を知つたらどんな顔をするんだろうな。

「じゃあ大仁君はあの席に座つてね。一番後ろの席だからつてサボらないで授業は眞面目に聞くよ」

「わかつてます」

昨日助けた少女が隣の席になるなんて所詮、小説の話である。隣の席はカメラを丁寧に拭いでいる男子生徒だ。

「やっぱり転校生だつたんだねー。上級生かなつて思つたけど同じ年なんだ。あ、留年していたりして年上だつたら「めんね」

「いや、同じ年だ」

いや、前の席にいた。さつき拍手を一生懸命していた生徒だ。

「あ、名前はねー、青木千華。青木とか千華ちゃんとかそんな呼び

方でいいよ」

「……え、あ、ああ……」

「詳しい事は休憩時間に教えたり聞いたりするからつ

好奇心の塊は吸血鬼にとつて害でしかない。根掘り葉掘り聞かれたり、中には色々と試そつとしたり……吸血鬼の中にも他人の身体をいじくつたりするのが大好きな人たちもいるけどな。ともかく、面倒な事にならないように祈るばかりだ。

どうせ休憩時間になれば俺の周りに人がやつてきて色々と話さればならないのだろう。ちょっとぐらい嘘とかついてもどうせ知り合いは居ないんだからいいよなあ。

休み時間、俺の考えは見事に当たつた。

「吸血鬼に襲われたんでしょ」

「大丈夫だつたんだよね」

「よく助かつたよなー、青木さん」

「まーね。私が襲われた時にさつそつと現れて助けてくれたすつごくかつこいいヒーローがいたんだよつ。まだ現代日本も捨てたものじやないねつ」

ちらつと俺の方を見てウインクをしてくる。どう返せばいいのかわからぬ……というか、転校生よりやつぱり事件の被害者の方に興味があるんだな。

ちょっとだけがつかり来て教科書を引っ張つていると隣の男子生徒から声をかけられた。

「転校生、このおれが質問してやるぜ」

「……は」

「おれの名前は緑川小次郎だ。趣味はオカルト全般……今はこの界隈を恐怖のすんごくに陥れている吸血鬼に興味を持つてゐる」

「恐怖のすんごくつて……」

「昨日、偶然おれはお前の前の席に陣取つてゐる青木千華が何者かに襲われているところを目撃した」

「……」

「こりや また厄介そうな奴に目を付けられたものだ。
「当然、俺は上空に放り投げられた青木千華なんぞに目などくれてやらず、襲つた犯人の方へとシャツターを切ろうとした。しかし、奴は人間業とは思えない素早さで俺の視界から逃げて行き、追いかけても遅かつた」

「そうか」

「ああ、そうだ。おいかけられないと踏んだ俺はせめて上空に放り投げられた青木千華がどうなつたかだけを写真に收めようとした。なんと、転校してきた大仁義人が既に青木千華と話しているではないか……人助けもできなかつた俺は肩をがっくりと落とし、家に帰つた」

「……それからどうしたよ」

「どうしたつて……これで終わりだ」

「こいつは何かを俺に伝えようとしているのかと思った。幸か不幸か単なるアホらしい。どうも見当外れの的外れだつたようだ。

「へえー、転校生君に助けてもらつたんだー」

「運命の出会いってやつかも」

そんな話をしている女子連中にため息をついて俺はウインクをまたしてきた青木千華とやらに手をふつてやつた。ショートカットがお似合いの女子生徒が早速知り合いになるなんて俺は運がいいかもしれない。

次の授業、俺は先生から借りた教科書を眺めながらノートを取る。現代社会の先生は年老いており、時折何かを思い出すかのように動かなくなる事がある。ちょっと不安だ。

先生が本日三度目のぼーっとした瞬間に前から二つ折りの紙が回ってきた。

「放課後、会議室の前で待ち合わせしよう」

直接休み時間に言つてくれればいいものを……どの道、この時間が終わればお昼だ。面倒だからその時に話をしてやつたほうがいいだろうな。

「せんせー、今日転校してきた大仁義人君が女子からもらつた秘密の手紙を見てにやにやしますー」

突如、緑川次郎が手を上げてそんな事を言い始めた。思考停止していた老人は動きだして俺をじつと見つめるとにやつとした。

「……大仁君か。ふむ、今日だけは多めに見てやるつ。清純な年頃じやろうからなあ」

「……」

嫌な生徒に嫌な教師だ。

第六話（後書き）

「」意見「」感想、誤字脱字報告等ありましたらお手数をおかけしますが感想、またはメッセージのどちらかでお知らせください。

第七話

俺が吸血鬼として生きてきた中で一番苦労してきた事。それは人間に吸血鬼と言う存在を説明することだ。説明してきた回数が少ないから苦手なのか、それとも俺自身が説明下手だから苦手なのかは定かではない。

とりあえず、吸血鬼という存在を説明しようと先入観を持つた人間が多い。その為、その人のイメージを壊さないような説明の仕方をしなくてはいけないのだ。まあ、面倒だから吸血鬼の組織と言つものがあつて、悪い吸血鬼を捕まえたりすると説明するのが大半である。

今回のケースでは何不自由なく、相手に説明する事が出来た。勘違いのおかげだらうな。会議室前に呼び出され、その後は体育館裏へと移動した。

「なるほど、義人君は正義の吸血鬼の組織に所属していく悪さをする吸血鬼を懲らしめる為にこの学校に潜入りに来たつてわけなんだねつ」

「いや、そうじゃなくて……」

今回ばかりはしっかりと説明しようとわかりやすいようにまとめたり、ＮＫＫの会誌を読ませてみたり、一人二役の劇でやつてもみせた。

残念ながら俺の努力は無駄に終わり、相手は勝手な解釈の元で吸血鬼と言う存在を認めたらしい。

「うんうん、言わなくたつてわかるよ。吸血鬼って言つたら絶対にダークヒーローでクールなイメージがあるもん。義人君が見た目クールじゃなくてあんまりかつこいい顔じゃないとしても、あたしの事を助けてくれるそれなりにいい人つて言つのはよくわかつたよ」

「それなりつて……」

的外れ、ではない為に難しい。俺の事をとりあえず危険人物ではないと思つてくれてているようだし、自ら協力してくれると言つてくれたのだ。これでよしとしよう。

「協力つて何すればいいのかなあ。あ、やつぱりあれだね。義人君にあたしの血を飲ませてあげればいいんでしょう」

「いや、別に血はいらないけど」

「え、そーなの？吸血鬼つて言つぐらいだから血が欲しいんでしょう？」

「うーん、そんなにがぶがぶ飲んでたら身体に悪いんだよ。腹八分つて言葉があるつしょ」

飲料つてわけじゃなくて食料という種類だと思つ。顎とかちゃんと使わないと劣つたりするらしいし、前も言つた通り血ばかり飲む吸血鬼は極端に日に弱くなつて灰燼に帰すのだ。

「ピンチになつた時に頼むぜ」

「ふーん、わかつた。それで血はどうやって飲むの？」

「色々と方法はあるけどなあ…まあ、注射器で血を吸つてパックに保存するとか…」

「あれ？首元にかぶつて噛みついたりしないの？」

「たまにやるよ」

一年に一度、あるかないかである。俺の親父はイメージを保つためにやつておけと言う。しかし、まず吸血中は誰にも見られない様にするのが基本だし、うら若き乙女の血が好きな俺としては後が消えるとはいえ首元の牙痕を残したくないと言つのも理由に挙げられる。

「へー、注射器と首元に噛みつくのってどっちが痛いの？」

「注射器、だろうな。歯から人間の脳に快樂を与える成分が放出されるんだよ。大体、本氣で噛みつくわけじゃないから痛くはないと思つ」

噛みつかれたことなんてないからわからない。中には吸血鬼の血を好む吸血鬼もいるから注意しないといつかはやられるかもし

れん。

と、まあ…こんな風に質問攻めとなつて俺の学校一日一日休みは残り十分程度となつた。

「ちょっとトイレ行つて来る」

「あ、一階の体育倉庫近くにあるトイレは行かないほうがいいよ」「ん、なんで?」

「体育館倉庫近くのトイレは暗くてねー、おばけが出るんだって。だから行かないほうがいいよ」

「……わかった」

なるほど、もしかしたら吸血鬼はそのトイレに潜んでその週の獲物を吟味しているかも知れないからな。怪しいと思ったところはしつかりと探してみないといけない。テレビに出てくるあいつの頭が何だかずれているような気がしたり、どう見ても作り話だろとつづきらざる負えない怖い話だつたり色々とあるもんだ。

以前、慌てていて男子トイレと女子トイレを間違えた事がある。うん、あの時は出でくる女性と鉢合わせして本当、やばかった。空を飛べなかつたらどうなつていたか……きっと今頃堀の中で首輪をつけられて強制労働をさせられていたに違いない。

俺が哀愁漂うような感じで引き戸をスライドさせると比較的綺麗な男子トイレが見えた。ただ、入つた時につんとしたアンモニアの匂いが俺をちょっとだけ不快にさせた。

「おばけねえ…」

トイレの中にあるもの、見える景色は……水色のタイルに半開きの掃除用具入れ、天井にはクモの巣なんてないし、そして床にはぴくりとも動かない異様に髪の長い女子生徒……。

「え…」

ラツキー、このまま覆いかぶさつて血を吸いながら……じゃなくて。

「ほん、こういう時こそ冷静になつて行動を起こさなくてはいけない。冷静さを失つた吸血鬼が慌てて人口呼吸とかやると人間の肺

は破裂すること間違いないしだ。

まずは肩を叩いて意識の有無を確認だな。

「大丈夫ですかー、意識ありますかー」

「…………」

駄目だ、反応してくれない。どーも意識ないようだ。

驚くほどの白い肌。その首元に近づいて噛みつこうとしてやめた。素直に手を置いてみる。すっごく美味しそうな人だけだな。

「うん、一応血は流れているし……呼吸は……してないな」

救急車を呼んだ方がよさそうだ。でも携帯電話鞄の中に入れちゃつてるしなあ。保健室に連れて行つたほうがいいのか……いや、こういふ時こそ思いきつて行動しないといけないはずだ。

まずは気道の確保。意識のない人が呼吸をしやすくして、シャツのボタンを外して……うわあ、本当、白くてすべすべしてての肌……心臓はちゃんと動いてるな、よし。

「人工呼吸だな……うん、俺ならやれる」

俺は勢いよく（もちろん手加減はしておくから安心して欲しい）息を吸い、うら若き少女の唇に自身の唇を重ねようとしたところで

……眠れるトイレの少女のお皿皿と僕ちゃんのお皿皿がぱっちしひつたんこした。

「うおっ……よかつた。意識ありますかー」

「…………」

その女子生徒は立ち上がり、何事もなかつたかのようにはだけたシャツを元に戻した後すぐにして行つた。

「…………なんだつたんだ、あれ」

もしかしてあれが青木千華の言つていたおばけ、なのだろうか。おばけにしては温かつたし、肌がすべすべしてたし……どう見ても女子生徒だろ。

イレギュラーな存在だった少女は見なかつた事にして俺はトイレの調査を行う事にした。調査と言つても特別な機械で何かをするわけではなく、鼻で匂いを嗅ぐだけだ。

吸血鬼が本気を出せば青森県産のリンゴとそれ以外のリンゴを分けることだって出来るんだぜ。他にもお風呂に入っていない人間のどれだけ風呂に入っていないかと言う日数も言いあてられるからすごいのである。

ともかく、吸血鬼が放つ血なまぐさい感じはなかつた。

「ここに吸血鬼はいないな」

さつきの女子生徒の匂いぐらいしかしない。うーん、しかし……

…さつきの子、さつと血がおいしいに違いない。

第八話

吸血鬼にも好みの異性と言つものが存在する。第一条件に血がおいしそう。それ以降は各吸血鬼の趣味によるものが多い。基本親子は好きなタイプが似るとか何とか、昔見せてもらつた親父の本に載つていた。

「愛があれば血のうまさまずとは関係ない」

そんなことを親父は言つ。まあ、俺もそう思うけどな。

こつちに引っ越してきて一週間たつた放課後。一週間つてあつといつ間かもしれないけど、放課後は帰宅部の青木千華と共に毎日帰つてヒーロー物を時代別順に見るなどして親交を深めた。そして、カメラを持つた緑川小次郎ともそれなりに仲良くなつたおかげで素晴らしい一枚をもらう事が出来たのだ。

「おおおっ。お前、これは……」

「いいだろう、生の真白りつこちゃんだ」

そういえば親父に貸したりつこちゃんの「写真集」が未だに帰つて来ない。俺のりつこちゃんは今頃どうしているんだろうか。

「くれ

「いいぜ」

「おおー、ありがとう、隣人よ……」

写真の中で俺に向かつて微笑んでくれているりつこちゃんの表情がいつもに比べて能天氣で、バカっぽく見えた。

「つて、これは青木千華じゃないかーっ」

「ありや、ばれたか」

何故か掃除用具入れから青木千華が出てきた。何でそんなところに入つてるんだよ。

「かつらかぶつてポーズも同じにすれば大丈夫だと思つたんだけどな」

「あのなー…」

「どこから説明すればいいんだろう。

「青木と違つてりつこちゃんは優げだけど元気なんだぞ。ひまわりに手足が付いたようなお前さんとは違う

「えへへ、あたしつてひまわりのイメージなんだ！ありがとう、義人君つ

「……はあ

嫌みがうまく伝わりません。どうしたらいいんでしょうか、先生。でもさ、義人君もこいつたアイドルつて好きなんだね」「ん、まあ、そりや……」

一番の理由は血がおいしそうだから……なんて言えないな。今時珍しいじゃないか。数だけ出して好きなの選べとか、あとでばら売りとかそんなアイドルじやないし。

「ふつーに可愛いからな」

「え、じゃあ…あたしもアイドルになつてみようかなー」

「それは無理な注文だ」

「えー、なんで」

「そりやお前……千華は大きくなつたらヒーローになつて世界を救わなくちゃいけないだろ」「あ、そつか

高校二年生がこんな事を言つていたら駄目だらう。そう言えれば…以前いた高校の英語教師が一度だけ地球防衛軍に入りたいんです、どうしたらいいんですかって質問（実話です）をマジで受けたつていつてたつけな。

俺達のボケを見ていた小次郎は立ち上がるとため息をついた。

「そろそろ次の授業に行つたほうがいいだろ」

「そうだな

「準備準備つと…あれ

ふと廊下の外を見て動きを止めた千華。何となく俺も廊下の方へと視線を向けるとお化けのような、幽霊のような異様に髪の長い女

子生徒が東から西へと歩いて行つた。男子トイレで倒れていた相手だと言う事に気が付く。

「どうした」

「今の人……吸血鬼っぽい」
「っぽい……ねえ。

「今のは一組、隣のクラスの須黒美咲さんだぜ」

「だぜつて……お前なんでそんなアルバム持つてるんだよ
しかも何氣に女子専用（注意：男子は載つておりません）つて書かれてるし。

「いや、ほら、おれも将来的には大仁みたいに青木っぽい何かを相棒にしてイエティとかカメラに収めたいんだよ
「おお、相棒認定出たよ！」

「……」

「事件は会議室で起きてるんじゃない、そこら辺で起きてるんだ！
机を叩いて憤る千華に俺はため息をついて突っ込んだ。

「いや、そんな事になつたら警察足りねえから……大体、作品間違つてないか」

「あは、そうだっけ？」

相棒はもうちょっと頭脳明晰な人間の方がいいんだけどな。

「ぴつたりじゃないか。ボケと突っ込みで」

「将来的には俺の方がボケに回りたいぜ」

「大丈夫だよ、ボケなくともあたしが突っ込んであげるから」

「それじゃ意味ないだろっ」

ふと、視線を感じて廊下の方を見ると長い黒髪がちらつと見えた
……気がした。

第九話

第九話

ＮＫＫに所属している吸血鬼は知っていることだ。三ヶ月に一回は会議が行われてＮＫＫの決まりごとが変更になつたりする。決まり事で不利益を被つたものが一名以上いた状態で、冷静に判断された後に決まり事を存続させるか、消滅させるか決まるのである。

基本的に不利益を被るような決まり事を提案するアホは居ない。暑い日は日傘を持ち歩こうとか誰が不利益被るんだろうか。ともかく、俺にとつてはどれもくだらないものばかりの気がする。

裁ぐときも血の事以外は人間達の法律と一緒に。罪は裁かれて終わりだ。回避したいときはどうすればいいか……一つの方法として、古城の主とかになればもみ消しとか考えられる。残念ながら庶民的な吸血鬼の方が多い為に出来るとしたら海外への逃亡ぐらいだろう。逃亡したつて九割が捕まる。何せ、人間より鼻がいいし一人を追いかける数が違う。他国の吸血鬼協会とも条約を結んでいるらしく外国で捕まつても送り返してくるからな。その後は逃亡したつて事でそれなりの罪がプラスされる。それなりの罪?そりや『中年男性の脂ぎった血を飲む事』だ。

ともかく、俺がいいたいことはルールと言つものはどこの世界にも存在しているつてわけだ。簡単に言つなら基本、男子は女子トイレに入つてはいけないとかな。

「どうすつかなあ」

俺が今現在お尻を便器にくつづけている場所は一階女子トイレ。大きいほうがあれだつたのであわてて駆け込んだ場所が何を間違つたのか女子トイレなのだ。もちろん、出した後はすぐに出ようと思つたさ。吸血鬼が大きい方を長々とやつしているなんてイメージされたくないだろ?

でもな、俺が入つた後、女子たちがたくさん入つてきてそこでよう

やく男子トイレではなく女子トイレに入つた事と言つ事実に気がついたんだよ。

そして今現在にいたるわけだ。

「落ち着け、俺。この絶対的な警備の中から何とか逃げ出す方法があるはずだ」

赤外線センサーがあるわけでもなし、数々の盗人を捕まえて来たプロがいるわけでもないのだ。大丈夫、ちょっと授業に遅れてしまふがチャイムさえなつてしまえば今そこにいる連中も授業に行くに決まつている。今のところは陸の孤島、壁際に追いやられた状態だ。しかし、いざれ活路は開く。

「あ、次は移動教室だつたね」

「そうだつた、もう行かないと」

「うん」

女子たちが出て行く音が聞こえ、俺はほんのちょっとだけ扉を開けて外を確認する。

「よし、いなーな」

もし、ばれていたらどうなつていただろ。きっと今頃学校の屋上で磔にされて頭にパンツをつけられて笑い物にされていたに違いない。

その恐怖はバンパイアハンターにあつた時と同じくらい怖いだろうな。ちなみに、バンパイアハンターにも二種類あつて一つは見境なく吸血鬼を滅ぼそうとしている連中と、NKKに所属している者たちがいる。前者の場合は日中に集団で襲いかかるが今の時代ではそんなに恐ろしい相手でもないかな。だつて吸血鬼も日中に活動しているからだ。それこそ人間が一個師団で襲つてきたとしてもおれでさえ負ける気がしない。

問題は後者の方だ。以前バンパイアハンターをしていた者たちが吸血鬼の現状を知つて悪い吸血鬼だけを襲うのだ。何より装備が充実していくここメンバーには勝てる気がしない。もつとも、俺がこの街に出没している吸血鬼にやられた場合はNKK総動員で件の

吸血鬼を滅ぼしにやつてくる。

ＺＫＫは暇人が多いからな。中には会社に有給を出してまでＺＫＫのイベント事に参加するつて吸血鬼もいるくらいだ。たとえどんなに優れた吸血鬼だろうと一国レベルの吸血鬼が一度に押し寄せてきたらひとたまりもないだろ？

「ん？」

誰かの視線を感じると思つたら一番奥の個室が少しだけ開いており、鼻先まで伸びた髪の間から目が見えていた。

「ひつ」

「……」

少女は静かに出てくると固まっている俺を引っ張つて個室まで連れ込んだ。

え、な、なんでだ？ もしかして俺をこれから水洗便所に頭を付けて水を流し、窒息させるつもりなんだろうかと考えていると今度は口をふさがれた。ち、ちくしょう、俺が本気になつて暴れればこんな弱い拘束なんてすぐに……

「……黙つて」

怒られてしまった。

外から誰かの歩く音が聞こえてきた。ぼーっとしていたとはいえ、まさか誰かがトイレにやつてくるとは思わなかつたぜ。

ということは、この人は俺の事を助けてくれたつて事でいいんだろ？ 髪に隠れた瞳からは何も知ることは出来ない……出来ないんだが、色白で実においしそうな血を持つていそうだ。

女子トイレに入ってきた人物は少しだけうろついた後、俺が先ほどまでいた隣の個室の扉を開けて中に入つた。そしてすぐさま出てくると今度はこちらの個室に近づいてきたのだ。

ノックの音が聞こえてきた。

「……入つてます」

その声を聞くと満足したようでノックをしていた人物は出て行った。少女も俺の口から手を放し、そつと個室の扉を開く。もちろん、そこには誰もいなかつた。

「助かつたよ」

「……須黒美咲」

「へ、あ、ああ、あんたの名前か」

「……窓から出たほうがいい」

窓の方を指をさしてから少女はトイレを出て行つた。彼女が外に出たのと同時にチャイムが鳴り響き、俺は指示に従つて窓から出た。俺の事を助けてくれた須黒美咲と話すチャンスが再びやつてきたのは意外な事にその日の放課後だつた。

第十話

吸血鬼は人間の健康の事をよく考えている。飲まれる運命にありのに優しさを半分持つているあの風邪薬みたいにな。何故かつて？そりや健康な人間の血はおいしいからである。誰だつてまづいものは口にしたくない。メタボ体系で脂汗出まくり、常にふーふー言つているような奴の血は誰も飲みたくない。

「飲め、飲まないとお前を地獄に送るぞ」

そんな事を言われても絶対にのみたくない。よつて、吸血鬼は人間の健康を気にする。もちろん、人間の事を餌だと思つてゐるわけじゃない。まあ、吸血鬼が人間に何かを与えてゐるのかと尋ねられたら返答する自信はないけどな。

そしてもう一つ。人間の血は感情によつて変わる。恐怖に慄いていたりする時に飲む血の味は癖のある物で大抵の吸血鬼には向かない。昔は襲つて飲んでいたからそんな味ばっかりだつたらしいけどな。今じや研究が進んで喜んでいいる時の血が一番うまいそうだ。サディスト吸血鬼なら徹底的にいじめてから血を飲むらしい……正直、吸血鬼にも幅があるから一概には言えないけどな。

以前、吸血鬼の牙から人間の脳に快楽を与えるような成分が出るとか言つていたと思う。それもうまい血を飲むために本能的にやつてゐるんじやないかと言う話だ。

ちなみに、以前吸血鬼の血を飲んだ事がある。ありやす「かつた。何せ、飲んでから舌がしごれて大変な目にあつたからな。一度と飲もうとは思わない代物である。

「ねえねえ、義人君つて吸血鬼の組織から派遣されるぐらいなんだから強いんだよね？」

放課後、下駄箱あたりで千華にそう尋ねられた。そういうや最近ずっと千華と帰つてゐなあ。まあ、ちゃんとこれまで襲われた場所を

千華に教えてもらつて言つ理由があるんだが女の子と変えてラッキーかもしれん。もしかするといのまま仲良くなつてあんなことやこんなことを……ま、ぐだらない事を考えるのはやめと」。

「強い……か」

千華に言われた事を眞面目に考えてみる。いや、考えるまでもないな、俺は弱い。しかし、『僕ちゃん弱いんでぢゅ』とか言えないだろ。

「千華、『強さ』って何だ?」

「え」

「……何度も敵にやられ、ぼろぼろになりながらも立ち上がって相手を倒そうとする。力及ばず、駄目だとわかつていてもやらなきやいけないことを達成しようとする……」

「つまり、義人君は精神的に強いけど肉体的には弱いって事だよね」墓穴を掘つてしまつた。千華は誤解しているようだな。肉体的にも弱い、そして『精神的にも弱い』のが俺だ。

「ああ、そうだな。ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ弱いぞ」

それでも人間よりははるかに強い。たとえ重武装している人間が束になつてかかつてきても負ける要素が無い。ただし、素つ裸の吸血鬼が襲つてきた場合は負ける確率の方が高くなるだろうな。

「じゃあどうやって吸血鬼と対峙して相手を倒すの」

「そりゃ……ここを使うんだよ」

自分の頭を軽く叩く。

「なるほど、超能力だね」

「いや、頭脳」

「え、脳みそ取り出してサイボーグにでもなるのかな」

て、つて、てつてれー『サイボーグ吸血鬼大仁義人君』って何だか間抜けな響きだよな。

「……」

「弱いのならしようがないよね。腕立て腹筋すればいいと思つよ……

それが、血を飲むとかさ」

一朝一夕で強くなれるとも思えないな。血を飲めば一時的に強くなれるからあながち間違いでもないかな。

「そうだな……ん」

「どうかしたの？」

「あ、いや、何でもない。悪いけど今日は先に帰つてくれ」

「えー、襲われた場所にいかなくていいの？」

「ああ、いつも千華に協力してもらつてるし、ちょっと用事を思い出したんだよ。先生にどやされるかもしれないから……悪いな」

「ちえー」

不平不満を言いつつ、了承してくれた。その後もぶつぶつ言いながら歩いて行くのを見届けたかったんだが大人しく俺は気になつたほづへとはすることにする。

俺が向かった場所は中庭。異様に髪の長い女子生徒が曲がり角を曲がつて行くのが見えたのだ。あんな髪の毛をしている女子高生なんて滅多にいないだろう。そして、間違えることもないはずだ。

「おーい、須黒 つ

「？」

俺の呼びかけに相手は振り返つてじつとこっちを見るだけだつた。視線が言いたいことは『何か用か』といつ冷たいものであつた。まあ、初対面つて言うか友達じゃないからしょうがないかな。うーむ、こういった関係から他の女子と話して居たらジエラシー全開でつんづんしてくれる関係になれねえものか。

あほな事を考えていては相手に失礼なので咳払いをしてから微笑みかける。これぞこの前編みだした『転校生さわやかスマイル』だ。

「今日助けてもらつた事を改めてお礼を言いに来たんだ」

「……別にいい

「そんな邪険に扱わないでくれよ。いつ引つ越してきて間もないんだ。本当、助かつたんだつてば」

転校してきて間もない生徒が女子トイレで発見された。一躍学校新聞の一面を飾るのは当然俺。あらぬ誤解と一人歩きする噂に俺の

評判はあつという間にガタ落ち、それこそ支持率は一割を割れ込む下落の一途をたどり、せつかく友人になれた青木千華なんかには後ろ指をさされる。拳句、フラグが立つたかもしない他の女子からは田の敵にされていた頃だろ？

「……この前、私の演技に引っかかつてくれた」

「へ、あー、トイレでの事か。って、あれ演技だったのか

「……うん」

表情は読めない……髪のせいだな。なんでこんなに髪の毛を長くしているのかわからないし、詳しく知るにはもう少しちょっと仲良くなれる必要があるんだろうなー。吸血鬼事件を終わらせる前に仲良くなれるかどうかなんてわからないけどな。あれだ、今から『一緒に帰らないかい、ハニー？』って提案すれば大丈夫だ。

「……じゃあ俺、帰るわ。今日は本当ありがとな

結局勇気が無いのでこんな感じで終わるのだ。

「……」

すつと差し出された白く美しい肌の右手。それが一体何を意味しているのかほんの少しだけわからなかつた。

「握手」

「ああ……」

握手って……なんでだろう。ともかく、俺は自分の手を制服で拭いてから須黒美咲と握手した。手はひんやりとしていて……なんかこう、よかつた。

「……またね」

「じゃあな」

まるで力尽きた兵士が掲げる白旗のじとき右手の振り具合で俺に手を振ってくれた。俺もそれに軽く返してから家に帰る事にしたのだった。これからぼちぼちやつていけば仲良くなれるかも知れん。

第十話（後書き）

奇数 青木千佳で偶数 須黒美咲ってな感じで取り扱つていこうかなと思っています。というわけで次回は奇数一回目ですね。前書きでも注意を促すよう努力しておきます。

第十一話・ち・青木家の人々

第十一話

人間、生きる事に復習つてものが必要だ。此処では以前ひどい目にあつたから行くのはやめておこうとか、此処のお姉ちゃんは優しかつたからもいつかい行こうとかそんなのだ。

俺の名前は大仁義人。日本吸血鬼委員会、ＮＫＫから羽津町で起つてている事件の調査と収束の為に派遣された吸血鬼なのさ。特技は空を飛ぶ事だったが、他の吸血鬼も飛んでいる為に特別とは言えない。新たなる俺の特技は『舌先を鼻先にくつつけることが出来る』だ。

そして羽津吸血鬼事件の調査を手伝つてくれる事になつた相棒が一人いる。名前を青木千華と言つて襲われているところを俺が助け、協力者になつてくれたのだ。

ただ、この青木千華と言う人物は世間一般常識である『やばい』を連発するような女子高生ではなかつた。

「日曜朝七時前には必ず起きてるよ！だつて戦隊ヒーローとか心に余裕を持つてみたいじやん」

そんな女子高生。いや、いるかもしれないけどね。

「あ、そうだ義人君。中間テストも終わつたからうちに来るといよいよ」

言われた場所は羽津町と隣町の境目ぐらいの場所だつた。最後の被害者が出た場所で、今では向こうも警戒しているのか千華を襲つてから行動はない。ただ、吸血鬼の血の匂いが時折風に乗つて俺の鼻まで運ばれてくるのでこの町にまだいるのだろう。

「え？ ああ……」

「家族が義人君に会いたいんだつてさ」

青木千華の家に招待された事はこれまでに何度かあつた。しかし、家族全員で俺を迎えてくれると言うのにちょっとだけ驚きながらも

承諾しておいた。晩飯の準備までしてくれるらしい。

「このまま行こうよ。さ、飛んで」

「あ、ああ……」

そしてやつてきたわけだ。まー、なんというか……実に異様な光景だった。

力チャ力チャという音が部屋中に鳴り響いており、千華の家族が持っているものは様々な色を併せ持つた玩具、ルービックキューブだ。

「一面」

「一面」

「三面」

「四面」

「六面……く、駄目だ。五面達成は難しい」

そんなことを言つて男泣きをしているのは多分、千華の父親だろう。

「パパ、めげちゃいや」

「そうよ、あなた」

「そうじやぞ」

「諦めなければ何とかなるわ」

やつたことないんだけど、あれつて五面だけとかできたっけか。まあ、そんな事はどうだつていい。家族全員でかちゃかちゃやつて

いる光景なんて不気味で見ていられない。

「みんな、義人君連れて來たよ」

千華の言葉で俺がいた事に気が付いたのか一斉にこっちを向いた。正直、怖かった。

「おお、噂の義人君か」

「若人じやなあ」

爺さんとおっさんが俺の右手と左手を掴んで上下に振つている。

どうすればいいのか対処に困つた。

「あ、ほらほら、義人君が困つてるよ」

「おお、すまんなあ」

「千華が男を連れてくるからどんな覆面ヒーローかと思つたが普通の男子生徒で安心したよ」

「ヒーローが大好きだとで困つていたのよ」

「よく言えば親しく、悪く言えば馴れ馴れしい家族である。しかし、家族の間でも問題になつていたんだな……ん？」

俺の股上ぐらいを触つている女の子を発見した。

「あ、この子はあたしの妹。由香、挨拶してちょうだい」

「青木由香、十二歳です。変身ベルトはどこですか？」

「えーっとね……」

「どういえばいいのだろう。というか、変身ベルトって何だらうか？」

「あ、ベルトじゃなくて眼鏡とかスプーンとかで変身するんですね？」

「あー……」

千華の方へと助けを求める。アイコンタクトで伝わったようで口を開いてくれた。

「あのね、由香、義人君は……」

青木由香と名乗った少女の耳元で何かを呟く。少女は顔を真つ赤に染めると部屋から出て行つてしまつた。

「千華、何言つたんだよ……」

「何？千華？呼び捨てだと……」

父親の表情がさつと変わつた。呼び捨てがまづかつたらしい。

「あ、いや、青木さん、妹さんに何言つたのかな？」

「いや、呼び捨てなんて気にしないでくれ。まさかそこまで親密だつたとはな。母さん、花婿が来てくれたんだ。酒を出してくれ！」

奥さんは「つくりと頷くと何かを決意したまなざしで旦那を見ていた。

「わかつたわ」

「よかつたのー、千華」

「え、あ、何か勘違いしてゐみたいだけど義人君はそんなんじゃな

いから「

そんなんじゃないから……ちょっとだけ俺の少年袋が傷ついたりした。確かにそんなんじゃないけどな。はは、はあ……。いつかそんなんだよと言つてもらいたいものではあるな。

第十一話・ち・青木家の人々（後書き）

念のためですが、奇数話と偶数話で話が違ってきます。どうでもいい？まあ、そうでしょう。ともかく、変わってきます。

第十一話・み・ファンタジー

第十一話

アステラッド王国から北へ進む。途中、二つの村を挟むことになるが、その先にはミハラ荒野が広がっている。

「姫、直に吸血鬼の根城につくころでしょう」

「そうですか」

「ええ、これからは気をつけて進みましょう」

ミハラ荒野の先に城をかまえる吸血鬼は王国の人々を襲い、近隣の村をも恐怖の底へとたたき落としていた。

数度の討伐隊が組まれ、幾度となく争いがおこつたりもしたのだが誰一人としてこの吸血鬼を倒せたものはいない。

数えて十七の歳になつた姫は自ら討伐隊に名乗り出て少數精銳で倒すことを王に誓つたのだ。

「姫、あれを見てください」

宫廷魔術師が指差す先には暗雲が立ち込めていた。

「あれは…」

「…大仁君？」

「うわ、須黒かよ…驚かせないでくれ」

少々集中しすぎたようである。下駄箱前で偶然出会つた須黒美咲に声をかけると図書館に行くとのことでついてきたのだ。

羽津吸血事件の新聞をもう一度読もつかと探していたら吸血鬼の小説を見つけたのでついつい読んでしまつた。絵は最近の萌え～が入つた感じのもので少し残念だけどな。

「…ごめんね」

「いや、もういい。どうせ最後まで読むつもりはないから持つていた小説を本棚に戻し、鞄を持って立ち上がる。

「で、須黒は何の本を借りにきたんだよ。まさか呪術とかそんなんじゃないだろ？」「じゃないだろ？」「ううん」

暗い、話しが独特、影がある…ファーストコンタクトなんて男子トイレの床だったからな。ちょっとした学校の怪談だ。

「…呪術とかじゃないよ」

「そりやそーだよな。そんな本が図書館にあるわけ…」

「…家にたくさんあるから借りる必要ない」

「…」

まあまあ、趣味は多様でいいんじゃないかな。

「じゃあ何借りたんだよ」

「…」

黙つて借りた本の後ろに顔を隠した。俺は縁の文字で書かれた文字を読む。

「えーっと、『友達と仲良くする方法（序）』か

「…」

読まれたことでさらに恥ずかしくなったようでさらに頭を隠すようにしてくる。どうでもいいけど、本の下から顔が出ちゃってるだ。

「…私たち…友達…なんだよね」

「あ、ああ」

そう言つてくれるのはうれしい、しかし、無表情でじつでも良さそうに言つるのはやめてほしいな。さつきみたいに本で顔を隠すとかしてくれるともつと嬉しいんだが。

「…」それで大仁君と仲良くなつて友情波を出す

聞きたくない単語である。一体友情波つてなんだよ。

「で、仲良くなるにはどうしたらいいって書いてるんだ」

「…」第一ステップ『同じ部活に入つたり、グループに所属します』つてある

「同じ部活…ねえ」

一年でこつちに転校してきたから部活なんて入つてないな。向こうでは一応入つていたんだぜ？『古城研究会』つて部活だな、うん。

「…大仁君の部活は？」

「俺はまだ転校してきて間もないからな。入つてねえよ」

「…そつ」

しばらく考えてから俺を置いて図書館から出していく。

「あ、須黒つ」

「図書館では静かにつ」

「すみませんつ」

図書委員に頭を下げてあわてて須黒のあとを追う。帰るつもりなのかと思って追いかけるも、下駄箱とは違うほうへと歩いていく。

「え、どこに行くんだよ」

「部室。先生に大仁君の入部届けを持つてく

「持つてくつて…」

須黒が入っている部活つて何だろうか。どうせ黒魔術同好会とか山羊を生贊にする会なんてそんな暗いものなんだろうな。そんなところには絶対に入らないぜ。

俺が連れてこられた場所は理科室。うーん、何とも言えない薬品の匂いが俺の鼻を襲うぜ。

「ここが部室か」

「…うん、入つて」

須黒はさつさと扉を開けて中に入る。俺もそれに続いた。

「あら、須黒さん」

「…先生、新入部員」

そこには俺の担任をしている玉富菜穂子先生だった。ちゃんと覚えているだろうか？俺が初めて図書館に行つた時に出会った人物である。

「あのー、先生」

「何かしら

「この部活つて名前何ですか」

「須黒さん、教えてないのね」

そんなことをいう先生に須黒は本日借りてきた本を見せていた。

しばらくの静寂を経て、先生は納得したよつて俺にこいつのだつた。

「この部活はね、『吸血鬼研究会』よ」

「え…」

その後、あれよあれといふ間に俺は『吸血鬼研究会』の部員となつてしまつた。

第十一話・み・ファンタジー（後書き）

こつちの偶数話ではいろんな話を入れていきたいと思つています。
勿論、義人がやつてきた事件も同時に進行していく予定なので期待
しないで待つていてください。

第十三話

吸血鬼の中にはストーカーを行う奴もいる。これはまあ、ふーんと思うかもしれない。しかし、考えてみてもうしたいことだ。空を飛ぶ、匂いで相手を追跡する、おまわりさんとこんなにちはしても睡眠術でどうにかなるといった超絶スキルを保有しているのだ。

そんな俺も千華を尾行している。もちろん、気が付かれてはいない。

いや、正直に言おう。尾行していた、なんて嘘だ。たまたま偶然、帰るのがちょっと遅くなつたから千華に先に帰つてもらつていたんだ。そうしたら先生が『今日は休養が入っちゃつたからまた今度ね』なんて言つもんだから急いで後を追つたんだよ。吸血鬼だからにいを頼りに千華を追いかけ、とある空き地の前までやつてきた。

「正義の使者、チカメンさんじょー！」

まさかクラスメートの見てはいけないものを見てしまつとは思いもしなかつた。

「きょー」

「きょー」

小学生（低学年）と思われる相手にヒーローショーを行つており、しかも風呂敷マントまでしつかりと着けている。ネーミングセンスの欠片もない『チカメン』はあつという間に戦闘員を蹴散らして怪人役の男の子に人差し指を突き付ける。

「さあ、世界をへんぺーそくで一杯にしようとしている悪者よ、その子を開放しなさい！」

「ふはははは」

「もうつ、笑い方は『へんぺっぺ』でしょつ！」

「あ、ごめんなさい……」

見ていて可哀想だな。

「へんぺっぺ、甘いな、チカメン……」

その後は見ていて恥ずかしくなるようなものだったのだったので詳細を省く。何が目的でこんな事をやっていたのか俺は知らないし、知りたくない。

「一緒に帰るうぜ」

もちろん、そんなことは言えない。放課後誘つて何か青春的な甘酸っぱいイベントを期待していた俺は気付かれない様にその場を後にしてしまった。

後日、朝のHRが始まる前に千華から何かを渡された。

「はい、これ

「なんだこれ」

「夏服に変わつたでしょ？だから義人君にもちょうど似合つかなーつて思つてさ。とりあえず家に帰つたら開けてみてよ。あ、言つておくけど盗まれたりしたら承知しないからね」

「あ、ああ……」

一体何が入つているんだろうか。食い物じゃないだろ？ 似合うかなつて言つたのだから服か何かだろうか。

「いつつ……」

「あれ？ どうしたの」

「……昨日、血を吸つた相手が悪かつたみたいでさ。腹の調子が悪くなつたんだよ」

手渡されたものを机の中にしまつてからため息をついた。この中で胃腸を整える薬があればいいんだけどな……飲んで治るかどう

かは知らないけどな。

「じゃあ早くトイレ行つたほうがいいんじゃないかなあ？」

「いや、何とかなるだろ？」「う

結論から言おう、一時間田の途中でやばくなつた。ビのぐりこやはくなつたからつて？そりや、手持ちが全部倒されて田の前が真つ暗になつたやばさだ。

「…せ、先生、トイレに行つてきます

「わかった、出してきなさい」「う

行つてきなさいならわかるけど、出してきなさいっておかしくないかと疑問を持つ余裕なんて一切ない俺は急いで教室を後にした。千華の声がクラスを大爆笑に陥らせたようだが、何と言つたか興味もなかつた。

トイレに入る時に大人数の人の気配を感じた。しかし、そんなものの気にしている場合でもなく、三階男子トイレの扉を素早く開けて一番奥に陣取り、きたるべき『対話』のために迎撃態勢を整える。ふと…小学生の頃、先生にしようもないことを尋ねた事があつたなと思いだした。

「先生、じょーわんにとうきんはせつしちゃんとめいちゃんを振り回すためにあるのはわかりますけど腹筋は何のためにあるんですか？」

先生は確か『踏ん張る為にあるんですよ』と答えた気がする。あれは適当に答えたんだろうなと今思えばわかるんだけども当時の俺は素直すぎたからな。

「なるほど、わが子を迅速かつ、鋭く排出するためにみんなは腹筋を鍛えているのか」

なんて馬鹿な事を考えていたからな。本気でやつて便器を貫かせ

たのはまずかつたな。

「んお、来た…」

～しばしばお待ちください～

対話を終え、個室から出た俺はいまいちな顔をした男子生徒を眺めつつ手を洗う。何か聞こえてきたので耳を澄ませると以下の内容が流れてきた。

『…我々はこの学校を乗っ取った。要求を飲まなければこの校舎は爆破させる。もちろん、下手に教室から出よつなんてするなら扉に設置しておいた爆弾が爆発し、ただでは済まんぞ。これは[冗談ではない]、本当の事だ』

「……梅雨に入つたからバカでも湧いたのか」
ぱーつとしていたら先生に怒られるからな。とりあえず教室に帰るか。

トイレの扉に手をかけてそのまま押す。ちやんと扉の取っ手の部分に『押』つてプレートが付いていたから間違いないだろう。これを行っても何も起こらないはずだ。

くだらない事を考えながら扉を押すとさつきの放送が本当だつたと言つ事を知つた。

羽津高校三階男子トイレの扉が爆発したんだからな、信じないほうがおかしい。

第十四話

私が大島を訪ねるのは何年振りだろうか。別れた妻の好きだった場所、そして私達一人を祝福してくれた場所だつた。しかし、もう一人で此処に来ることなどあり得ないのだ。

「あなたの妻でいる事に疲れました」

そう言つて妻は私に頭を下げたのだ。明け方はいつもの通り、笑みを絶やさぬ女性だつたと言うのに判を押した薄紙を渡すときは笑みなどどこにもなく、どこか苦しそうに見えた。

「後悔しないのか

「はい」

素つ気なく、感情のこもつていらない返事は私に続きの言葉を言わせることはなかつた。ただ一つ、頷いて寝室から判子を持ってきてその薄紙に押しつけた。

「ありがとうございます」

妻の、いや、元妻の感謝の言葉は私の心を抉つて一度と感知する事のない傷を負わせてくれたのだ。

幸い、子供のいない家庭で良かつたかもしれない。子供の出来ぬ身体だと結婚前にいきなり告げられたが、そんな事はどうでもよかつた。一緒に暮らせればそれでいい、私と一生いてほしいのだと伝えたあの日の言葉を思い出す。

元妻が、君江が私に離婚届を渡した理由は今となつてはわからない。離婚して一ヶ月後、君江は自らの命を絶つてしまつたからだ。後を追う事も考え、一度は準備までした。しかし、あちらに行つて君江に会つたとしても私は拒絶されるに違いない。

大島も昔と違つてている。もしかしたら、君江の好きだつた私も変わつてしまつていたのだろうか。今となつては知る由もない。

「みんなー、今日もありがとー」

テレビからよく知るアイドルの声が聞こえてくる。読みかけの文

学作品をさつさと閉じて椅子に座りなおして、音量を大きくした。

「お、そういえば今日はりつこちゃんの番組があるんだつたな」

部室である理科室で見るのはいかがなものかと思うだろう。しかし、先生も今日は出張でないし、須黒も休みだ。つまり、今この理科室の主は俺なのである。下僕の骸骨と人体模型と一緒にりつこちゃん観賞が今日の部活内容だ。

「大仁、おれもまぜてくれよ」

理科室の扉が開いてカメラを抱えた緑川が入ってくる。

「なんだ緑川かよ」

「なんだとはなんだ。お前一人で見るなんてもつたいないだろ」

「もつたいなくはないだろ」

「どじがもつたいないのか、詳しく述ねよ」と考えるも止める。そんなことよりりつこちゃんだ。

「しようがないからお前も見ていいよ」

「なんだか引っかかるような言い方だな。といひで、最近放課後一緒にいる須黒美咲はどうしたんだよ」

緑川の声がうるさいので音量をさらによくする。

「さあな。今日は休みだそうだ」

「ふーん、そうなのか。お前、こゝに須黒がいたらこれみるのかよ？」

「そりやそうだろ。先生が出張だから見てもいいだろ。どつせ研究とか言って吸血捕獲用のくだらない罠を作るよりも、りつこちゃんを見ていたほうが健全だ」

「まー、たしかにそうだわな」

「おー、テレビなんかじやなくていつか部費でコンサートを見に行きたいもんだ……」

俺がこの場所にやつてきたのはあくまでＺＫＫの調査のためだ。これまで幾度となくコンサートが行われる田には騒動が起つていたからな、行つた事が無いんだよ。

そんな不運少年の俺にすつと一枚のチケットが差し出される。

「元気出せよ。これ、やるからよー」

「これねつ…」

隣県のコンサート場で行われる真白つゝこちゃんのコンサートチケットだつた。

「どういう風の吹きまわしだよ」

「いや、この前懸賞で偶然手に入つたんだよ。だから大仁にやるよ」怪しい、絶対に怪しい。これは俺の事を何かしらの罠にほめようと思つてゐるのかもしれないぞ。

「…で、だ

「やつぱり何か裏があるんだな」

「そりやそうだ。世の中ギブ君とテイクひやんで成り立つてるんだよ

」

その通りだらうな。

「金ならないぞ」

「違う、金なんていらねえよ」

テレビではりつこちゃんのインタビューが終わり、新曲のお披露目があつてゐた。

「…実はだな、俺らの担任でお前の部活の顧問である玉富菜穂子先生が吸血鬼なんじゃないかつて話があるんだよ」

「え？」

にわかには信じられないよつな話だつた。

「……詳しく教えてくれよ」

「一番最初に襲われた女子生徒とかに話を聞いていたり、田撃者のおばちゃんたちへと聞き込みを俺はやつたんだよ。するとた、最初の方はもうあまり情報が得られてないんだけど、玉富先生を見たつて言う人が結構出て来たんだよ」

「……本当かよ、それ」

「ああ、警察もそれを怪しんでいたようだ。だけど、先生 자체が途中で襲われているからな。警察はその可能性を消したんだよ。その後、事件現場での先生の目撃報告はない……でも個人的に気になるから調べてほしいんだ。おれよりお前の方が玉富先生に会うからな」

「で、俺は玉富先生が吸血鬼かどうか調べればいいだけなのか？」

親父に連絡してから名簿を確認してもらうだけでいい。違うのなら夜道で襲つて血を飲んでみれば一発でわかる。

「ああ、違つた場合は先生に謝つておいてくれよ」

「わかった」

たつたそれだけならお安い御用だ。

「でもよ、先生が吸血鬼だったとしても素直にはいそうですって言わないと思うぜ」

「……まあ、そん時はしじうがねえ」

「しじうがねえって……」

「ともかく、俺は吸血鬼の写真を撮れればいいんだよ。何ならお前が裏地の赤い黒マント着るか？」

「死んでもいやだね」

俺の親父なら快く引き受けてくれるに違いない。大体、創作物の後付けだろうに……。まあ、先生が吸血鬼かどうか調べるのは俺にとっても有益だろう。これまで相手は男どばかり思つていたんだけど、もしかしたら変わつた味覚の持ち主かもしれないからな。

第十四話・み・文学（後書き）

サブタイトルの文学後にはなんちゃってがつきます。え？なんちゃってすら生ぬるい？見逃してやってくださいよ、旦那。

第十五話・ち・反旗を翻す一 生徒

第十五話

ＮＫＫでもちゃんと報酬は支払われる。無論、保護者などがＮＫＫに所属しているならばそちらの方に振り込まれる。職を持つていな者は一人前と思われない為、身元引受人もいない吸血鬼はお金も貰う事が出来ない。

大抵の吸血鬼はちゃんと職を持つていて、学業を疎かにするようなものがＮＫＫからの仕事をもらえると言つわけでもない。その為、報酬をもらっている吸血鬼の割合は全体的に見て少ないが川でおぼれている子供を助けたとかそういう行為を行つことによつて一般の吸血鬼だつてもらえるわけだ。

つまりは高校を占拠するような連中をけちょんけちょんにしてやれば、俺はかなりの額を手に入れる事が出来るのだ。

男は実に物騒なものを持つて学校の廊下に佇んでいた。彼の仕事は今のことろ見張り。高校時代にスカウトされてその道に入り、特殊部隊の一員として生活しているのだ。高校を襲撃した事に関しては特に何も思つてはいない。仕事は仕事と割り切るタイプなのである。

誰も見ていないからさぼっちゃえとか授業風景つてこんな感じなのかなあなんて教室を覗いたりしない、プロだから。

先ほどの爆発音の時も動じることはなく、見張りが一人見に行つた。そろそろ戻つてくる頃合いだらう。

「…ん」

気のせいだらうか…足元から何か音が聞こえてくる。男はしつかりと足元を確認しようとしてすゞい速さで天井に頭をぶつける事となつた。

「ふう……つたく、高校が占拠されるなんて信じられないね」扉を開けたら爆発するし、テレビで見たような重武装した人がこっち来て俺に銃を向けてくるし……一体何が起こっているんだろう。もちろん、そんな恐ろしい相手にはそれなりの対処をさせていただいた。爆発で制服も吹き飛んじまつたけど、トイレで誰かの忘れ物の体操服を手に入れられたからラッキーだったかな。

「……この階には見張りがないのか……つてここは五階か。三年生の教室がいっぱいだよな……」

他に見張りは居ないのだろうか、スパイ映画よろしく壁に背中をくっつけて近くの廊下へと移動する事にしたのだった。壁をこつこつと叩いても頭に『！』マークが出たかどうかも確認できない。「うん、いないな。とりあえず俺のクラスの生徒達も監禁されるだろうから偶然を装つて助けに行こう」

三階に下りる途中でも見張りを一人発見したので背後から強襲。その後はひん剥いて廊下の壁に貼りつけておいた。ついでに血も吸つておいたので目を覚ましたとしても貧血で倒れるに違いない。

「今思えば三年生を助けておけばよかつたかな……いや、後で助ければいいか」

後悔するよりも前に進むことだけを考えよう。もし、負傷者が出てとしても俺のせいではない。俺はこの学校の何の変哲もない生徒だ。

曲がり角を曲がつて見張りっぽい人が立っていた。すぐさま股間を蹴りあげたのだが反応が無い。焦った俺は腹部に五発、そしてアッパーを格ゲーよろしく綺麗に決めて相手を吹き飛ばした。壁にめり込むなんてそうそうみられないだろうな。

「……あ

そしてその見張りがトイレから出た時に遭遇した相手だと言う事

に気が付いた。もちろん、既に気絶している。

「…あまり手加減せずに殴つてしまつてすみませんでした」

間違つて相手を傷つけてしまつた時は急いで謝らなければならぬ。しかし、あつちが悪いのである。学校を占拠した拳句に爆弾なんて取り付けるから罰が当たつたんだと思つてもらいたいものだ。自分の教室前までやつてくると扉の部分に爆弾が取り付けられた。『爆弾です。取扱い注意』と書かれているから間違いないだろう。

「うーん、どうすりや解除できるんだろうか」

もしかしたら専用の道具とか必要かもしねいな。いやいや、赤か、青か、そういう選択をして初めて解除できるような代物かもしれない。

もう少し情報が欲しかつた俺はじつくりと爆弾を眺めた。

『ON/OFF』

電源の下には扉を開けるとスイッチが即入るよう仕掛けられていた。とつあえず、爆弾』と引つ張つたら扉が開いてしまつた。

「……」

「あ、義人君つ」

当然、俺の教室だから千華がいるわけで、ついでに授業が行われていた。授業中にトイレに行つたんだから戻つてきても授業中だろうな。しかし、普通に授業をしているつておかしくないだろうか。

「あのー、先生、今つて学校占拠されてませんか」

「そつだが、授業中だろう。それに廊下に出たら扉に付けられてる爆弾が爆発するそつだぞ。さつき爆発音がトイレの方から聞こえてきたのだからまちがいなうだろうな」

その通りである。被害者は俺だ。

「でも、今なら逃げられますよ」

「何、そつなのか」

「ええ」

「おおー、そんな声をクラスメートたちがあげる。
「多分、見つかったら撃たれるんじゃないかなあ」

千華の一言でクラスはまた静かになった。

「それに、占拠している人たちがここにきたらまずいんじゃないかな。扉も壊れてるし…」

「大仁、扉を直してきなさい」

「わかりました」

「あ、私も手伝うよ」

千華と一緒に廊下に出て扉をはめなおす。もちろん、爆弾も元に戻ってしまった。

「これさ、開けたら爆発するんだよね？」

「そりゃー、そうだろうな。さつき扉開けたら爆発したから間違いないだろうな」

「え、じゃあさつきの爆発音って義人君だったの？」

「ああ、開けたらいきなり爆発したからびっくりしたぜ」

「なるほど、だから体操服なんだね」

納得したとばかりに頷いている。

「怪我とかしてないの？」

「あの程度なら大丈夫だよ。とりあえず、他の見張りも何とかしてくれる。そうしたらまた呼びに来るから教室内にいるといい」

「えー、あたしもついてくよ」

「いや、危ないだろ。相手は銃を持っていたからなあ。近くで見たらまちがいない、あれは本物だな、うん」

そんな時に千華から何か手渡された。

「なんだこれ」

「もうつ、忘れちゃったの？ 今朝あげた奴だよ」

「あー、あれね。で、これが何か役に立つのかよ？」

役に立つよと頷いて千華はその包みを俺の前で広げてくれた。

「じゃじゃーん、吸血鬼の必須アイテムのマントだよ！」

「……」

「前々から義人君が吸血鬼って言つても何かおかしいなあつて思つていたんだけどこの前やつとわかつたんだ。マントを付けていないつてね。だから作つたんだよ……って、あれ、義人君？」

「……いや、別にマントはいらねえよ」

「あ、そつか。マイマント持つてることだよね？でもさでもさ、せつかく作つてあげたんだからこれからいつちを愛用してくれると嬉しいんだけど」

「……マントはもつてねえよ」

「じゃあよかつた！はい、これをいつひいつひやつひ……出来上が

りー

裏地は真紅の黒マント。これを着用すればあつといつ間に貴方も

吸血鬼にはあ。

「それにね、襟も立つていてるから……横から見られたり、後ろから見られたらぐらいなら義人君だつてばれないと思うよ」

「……なるほど」

「うん、義人君はヒーローだからね。顔はちゃんと隠さないと駄目だよつ」

だよつ

そういうつて千華は俺に親指を立ててくれた。

「じゃ、行こつか」

「……いや、あぶねえよ」

「一般人はヒーローが護らないと駄目だよ。だから危なくなつたら護つてね」

「……はあ、わかつたよ。その代わり、俺の言つ事はちゃんと聞いてくれよ

「はーい」

大丈夫なんだろうか…かなり不安だ。

第十六話・み・SF（前書き）

ボタン連打すると壊れるもんなんですよ。

第十六話・み・SF

第十六話

「マ、マスター、そんなに…それ以上はこ、壊れてしまいます」
「あん? 壊れたって大丈夫だよ。直してもらえばいいんだからよお…それか、新しく買いえるか、どっちかだな」

「そんな…」

「じょーだんだよ、冗談。お前じやないと意味がないからな…全ぐ、機械が心を持つなんてすごいもんだ」

「あつ、あつ…くつ…そ、それはマスターが…」

「……大仁君、何読んでるの?」

「うわあああああつ」

俺は読んでいた本を宙に放り投げ、落としてしまった。表紙を読まれない様に急いで裏返しにして腰にはさんだ。

「須黒お、驚かすなよ」

「……」

須黒は何を言つてもなく、俺の後ろに回り込もうとした。俺も身体を動かして背中を見せない様に努力する。見られたら破滅である。

「……大仁君、見せて」

「駄目だ、これは男の浪漫だからな。それに単なるSF小説だよ。いや、正確には未来のSFラブコメディーなんだ」

「……本当?」

嘘はついてない。しかし、たまにあるだろ? 後ろめたい事とかやつていて説明が必要なときとか…自信を持たないとばれちゃうからな。

「ああ、本当だ。自慢じゃないが俺はこれまで嘘を年に一十回ぐら

いしか付いた事がない

緑川に借りたもので、俺のものではない。こんなマニアックな小説誰が買って読むんだろうかなあ…読んでみたら少しだけ面白かったけどや。

「ともかく、これから部活だろ、そいつと一緒にいが」

「これ以上話を続けると何かしらぼろが出るだひが。ばれたら最後、『Hitchな小説を熟読している転校生』といつ肩書きを得た俺は後ろ指を指されて高校生活を送る羽田になるのだ。

「……今日は部活休み。玉富先生が大仁君にそいつを教えておいてほしいって言ったから探しに来た」

「そりなのか

部活の話でもするつもりだったのに今日が休みとは残念なものだな。

「じゃあ、今日は帰るうぜ。須黒もやることないだろ?」

須黒が少しだけわき見をした瞬間を俺は見逃さなかつた。思案しているうちに急いで鞄の奥底に小説を押しこんで立ち上がる。

「…わかった

そう言つた後に俺の後ろへと移動し、腰辺りを見ている。しかし、当然ながらそこに本はない。

「たまにはどつか寄つて帰るか?あ、そつだ。俺、須黒ん家にいつてみたいなあ

「……私の……家?」

「ああ

しばらぐの間考えているようだつた。すばらぐ長い時間が過ぎたようだが、一分程度だらう。

「嫌

「……嫌、か」

女の子の家に行きたいと言つた。拒絶された、一言、『嫌』と…。結構心を抉る言葉だな。

「じゃ、じゃあ俺の住んでるアパートに遊びに来るか?」
これまた嫌だと言われたら『そ、そつか…』といつて一人さびしく帰るつもりだった。でも、いないうけど神様は俺の事を見放したりしなかった。

「わかった…」

「お、そつか…そりやよかつた」

そして俺の住んでいるアパート（リバーサイド『満開』はさすがに恥ずかしいな）に招待する事になった。

考えてみたら女の子を自分の部屋に招待するなんて何年振りだろうか。うーむ、これは何かいい所を見せたいもんだな…でも特に何もないのが残念だ。

帰りつくまでに何か思いつくかと楽観視していた…まあ、結果は『なにも思いつきませんでした』なんだけどな。いや、客観的に考えてみれば何かいい事が思いつくかもしれない。

うーむ、こんな感じだろうか…若い吸血鬼のところに麗しき（？）乙女が何も知らずにやつてきた。吸血鬼は料理を出すと言つて引つ込む。出て来た料理に口を付けた乙女は眠つてしまつ。次に乙女が目を覚ました時には首筋に牙を突き立てた吸血鬼が…いや、駄目だな。

じゃあ健全な男子が考えるようなものがいいのかもしれない。男子の部屋に女子がやつてくる、色々と話をしていくにつれて「一ヒーが進み、男はお代りをついでこようと立ち上がるも部屋に落ちていたバナナの皮に引っかかつて女子を押し倒してそれから…

「……大仁君」

「へ、な、なんだ」

「目が怖い…」

「あ、あ、そつか?」

「…うん」

「悪い…じゃ、入るか」

鍵をひねつて中に須黒を入れる。彼女が帰るまで適当な世間話をしてお茶を濁し、帰つてもらう事としよう。

いくつか部屋があるんだが、使用している部屋は三部屋。残りは全て物置である。自室は少し散らかっているし、下手をして吸血鬼についての調査書類なんか見られたら面倒だから台所が間近にある応接間に案内しておいた。

「……真白りつこの……ポスター？」

「あー、それか。一番気についてるものなんだ。やっぱりうううのは一つだから映えるんだよなあ」

「一ヒーを入れて須黒の前に置く。

「……真白りつこ…好きなの？」

「最近のアイドルにしちゃ売れた後にばら売りじゃない一人だし、普通にかわいいだろ」

「……」

「一応ライブのDVDもあるけど実家に置きっぱなしだから此処にはねえんだ」

世の中にはDVDをコピーするとか言つ何とも業界にとつて悪い事をしている人がいたりする……ちやんとDVDは買いましょう。

「…見なくていい」

「そうか、残念だな」

真白りつこはどちらかと「うと男よりも女に人気がある。何でも、りつこちゃんの事を嫌いな男から言わせれば『アイドルっぽくない』のが原因だそうだ。

「そういえば、須黒つてりつこちゃんっぽいんだよなあ…」
髪からちりりと見える瞳は俺の方を見ていた。いや、なんだか睨んでいるように見えて怖かつた。

「ど、どうしたんだよ」

「……別に」

「もしかしてりつこちゃん嫌いなのか？」

「……そりゃない」

「うーむ、何か気に入らないことでもあったのかねえ……よし、じゃあコンサー卜に誘つてみるかな。」

緑川からもうつたチケットを持ってきて須黒の前におく。

「これは……」

「こ」の前緑川から交換条件でもうつたんだよ。一枚あるから一緒にいかないか」

「……ごめん、こ」の日は用事がある」

「そりゃあ……残念だな」

女の子を誘つて失敗すると地味に心が傷つくな。うう、初めて誘つたのに……。

「じゃあさ、いつか一緒に行こうぜ」

「……」

しばらく俺を見てから須黒は頷いた。とりあえず『いつか一緒に行く』という約束さえとりつけておけば後で強引に誘う事が出来るかもしけない。最近、吸血鬼探す事を疎かにしているようだけど……

大丈夫か、俺？

第十七話・ち・偉い人は高いところが好き

第十七話

吸血鬼がどれだけ丈夫な存在なのか…疑問に持つこともあるだろう。よくある話じや銀の弾丸とやらで一発らしいな。俺自体銀の弾丸を喰らつた事はない。ただ、親父は心臓に一発もつた事がある。そうで感想を聞いたところ『それなりに痛かった』そうである。ちよつとグロテスクな話だが、それじやあ首と胴体を離してみたらどうか? その状態を一週間保てば吸血鬼は死んでしまつらし。江戸時代にさらし首にされた吸血鬼は己の首を探してさまよい、その光景を見た人たちが後世に『首なし武者の話』を伝えたそうである。ともかく、現行武器に対しめっぽう強い吸血鬼だ。それこそ専用装備ではないと倒すのは難しい。たとえ、俺みたいなへっぽこ吸血鬼だつたとしてもな。

「ねえ、義人君」

「なんだよ」

「……偉い人つてどこにいるのかな? やつぱり、屋上だよね」

「どうだろうなあ」

今からでも教室に連れて帰つた方がいいのかもしね。しかし、途中でまた面倒な事になるのもごめんこうむりたいものだ。結局、他にあてがない為に千華のいうとおり屋上へと向かう事にした。四階へ続く階段のところで見張りを見つけたため、千華に隠れているよう指示。手早く気絶させてパンツ一丁にしておいた。

「義人君、なんで裸にする必要があるの?」

縛り上げている最中に尋ねて來たので物騒な代物を指差しておいた。

「そりや、目を覚ましてナイフとか隠し持つていたら逃げられて大変だらう。だからこうやって裸にしておくのさ」

「ふーん、そうなんだ。手慣れてるね?」

そういうのは俺の手元を見て言ひてほしいものだな。切らない限りほどけないし、ほどこつにも吸血鬼の腕力で縛つておいたから難しいだろ？

「あ、義人君…見張りがいるよ」

「ん、ああ…じゃ、気を付けて気絶させてくる」

「ちょっと待つてよ」

廊下に出て行こうとした俺を階段踊り場まで連れ戻す。不謹慎だけど腕の部分にむ、胸が当たつて……いや、何でもない。

「なんだよ？ 気付かれたらやばいだろ」

「あたしに作戦があるんだ」

「作戦つて…俺がちやちやつと終わらせた方が早いだろ」

出て行く、殴る、終わり…簡単スリーステップで見張りの人をあつちの世界に送つてあげられるんだからな。一番楽なんじゃないだろうか。

「それもそうだけど、もうちょっと田立たないやり方でやつたほうがいいと思うんだ。さつきから義人君が見張りの人たちを壁にのめり込ませたりして校舎に被害が出ているし…」

「た、確かに…」

「非常事態と言つ事もあつてそれなりに対処させてもらつて…」

「だが、やはりまずいかもしれない。」

「それにさ、これ終わつた後に僕がやりました…って義人君言わないでしょ」

「そりやそつだろ。そんなことしたら柔道部とか空手部からお誘い受けるぞ」

意外なところでアームレスリング部かもしけれないな。

「だから、もうちょっと校舎に被害が出ないようにした方がいいよ」「でもよお、今更やつてどうするんだよ……」

「……そこの人、両手を上げろ」

後ろを振り返ると目だし帽の特殊兵みたいな見張りが俺たち二人に銃を向けていた。

「怪しい奴らだ」

「あ、あたしたちは全然怪しい奴じゃないですよつ」

「そうだ、俺たちはこの学校の生徒だ。自分の教室に行く為に一階から上がつて来たんだよ」

「ちょっと、義人君つ」

「何、一階から上がつてきただと？見張りがいただろつ…動くなよ、動くと撃つぞ」

もうつ、義人君のせいでこんな事になつたんだからねつ。どうにかしてよつ。そんな千華の視線を受けて俺はため息をついた。

「あのー」

「なんだ……うつ」

ちよつと睨んでやると相手は倒れてしまつた。トランシーバーで誰かに連絡するつもりだつたらしい。

「あれ、なんでこの人倒れたの。貧血かな」

「さあなあ、貧血なんじやないのか。とりあえず、裸にして縛り上げだな」

千華に説明するのが面倒な為になんで倒れたのかは伏せておくとしよう。きっと説明したところでうまく伝わらず『すつごーい、吸血鬼つて目からビームも出せるんだ』と言われるに違ひない。どうも最近、千華に『吸血鬼とはびっくり人間』と思われている気がする。

「そう言えば？」

「ん、何だよ」

「一人捕まえてこの学校に何人でやつてきたのかとか、目的は何だとか…色々聞いたほうがよかつたんじやないかな」

「……いや、俺もさ、考えてたよ。うん、屋上に一番偉い人がいるのならその人に聞けばいいだけだからな。そ、急げ」

「えー、嘘つぽいよ」

肉体的に優秀な吸血鬼は頭の方も優秀、……と言うわけでもない。

やはり、こればっかりは勉強とかして鍛えないと頭の回転が悪いみ

たいだな。

次の見張りは捕まえようと心に固く誓つたはずだが、屋上までの道のりに一人もいなかつたので諦めた。

「やっぱり、屋上だよ。普段鍵がかかっているはずなのにかかってないもん」

なるほど、言われる通り開いているようだ。

「あー、千華」

「何？」

「お前も放送聞いただろ。多分、この扉にも爆弾が付いていると思うから下で待つてくれ」

「……わかつたよ。下で義人君が勝てるようご祈つてゐるよ」

「そうか、ありがとよ」

千華の後ろ姿を見送る。適當な事を言つてみたけど、あるわけないだろ？ さすがに此処には爆弾なんて付いてないだろ？ だつてさ、どう考へてもこの扉を開けるのは学校を占拠した奴らだろ？ し、絶対につけてないって、うん。

ドアノブをひねつて押してみると本日二度目の派手な音が校内に響き渡つた。

第十八話：み・ホラー

第十八話

怖い話は様々な種類がある。それこそ話し手によつて変わるし、アレンジの加えられたものは大体聞いていれば数多の話を聞いてきた者たちには大体わかるものだろう。涼しくなる為、ではなく、今回は使い回しの多い件について一言物申したい。

「そんなもの（念佛）聞かないよ」

耳元でささやかれるパターンなら本当の話かどうかも怪しい。そもそも、白い服装に長髪、細い顎をした女が出てきたり、おかげで少女が出てくるといった話は怪しそう。ショートカットの幽霊が出てくる話なんてほぼ聞かないし、坊主頭の少年だっていいはずだ。兵隊の幽霊が出てくるならそれこそ、原始人の靈が出てきても不思議ではないだろ？

夜中に幽霊の類は出るともいふが、他には夕方と夜の間、逢魔時に出ると云つてもあるのだ。実際、夕方と深夜、どちらに出やすいか試すために作者は隣町のはずれにある自殺者の多いと言われているダムに向かう予定にしている。

この本を書いた作者が行方不明になつた、そう帶に書かれていた。行方知れずになつて半年以上が経つてゐるらしい……

「全く、ライブに行くまでの時間つぶしに読むもんじやないな」

適当に本を見繕つて買ってみたら失敗だつたぜ。今日は怖くて眠れないかも。しかし、ライブ会場に着いてからどうすればいいんだろうなあ。

俺以外の乗客もどうやらライブが担当の連中が多いらしい。徹夜組とか居るんだろうか？ともかく、はっぴを着ていろいろをみると相当なファンらしいな……。

ふと、夕焼けを見る為に電車の外を見ると空を飛んでいる人型の何かが目の前を通り過ぎて行つた。他の乗客は誰一人気が付いていない。いやついていたり、話しこんでいたりしていたからだ。

あれはなんなんだ。きっと一般人ならそういうだろうな。あの飛び方、電車の中からでも鼻につく血の匂い、黒いマント……はさすがにつけてはいない。

どうやら吸血鬼のようだ。これまで行動を見せなかつたのに俺にとつて大事なようが出来たら姿を現すなんて本当、ふざけてやがる。もちろん、俺には二つの選択肢がある。一つはりつこちゃんのお姿を生で見る為に吸血鬼を見なかつた事にしてこのまま電車に揺られてライブ会場を目指すことだ。そしてもう一つは俺がこの町にやつてきた本当の理由の為に頑張る事、だ。

「……しょーがねえか」

須黒の奴を誘わなくて（誘えなくて）正解だつたな。もし、一緒にいたら何かしらの理由を付ける必要があつたからな。ちょっとトイレに行きたくなつたとかじや通用しないだろうからな。

車両の一番後ろまで移動し、辺りに人がいない事を確認してから窓を突き破つて外に出る。そして俺はそのまま先ほどの吸血鬼を追いかける事にした。

力の強い吸血鬼は飛ぶスピードも速い。頭が悪いが力は強いと言つたタイプは例外で能力表を六つに分けたレーダータイプの表で表すなら大体まとまつた六角形になる。俺？ 俺はちょっと小さな六角形かな。

何とか吸血鬼の背中が見えてきたところで既にふらふら……これから襲われたりしたら大変な事になるな。一方的な攻撃、俺はまるでサンドバックのように相手にもてあそばれて終わりだ。まあ、吸血鬼の中に好戦的なタイプもいれば話し合いで解決できるような奴もいるので一概に俺がぼこぼこにされるわけでもない。

吸血鬼が一人の少女に目を付けたおかげで何とか追いつく事が出来た。そして俺に気が付いていないのか少女から少しだけ離れたと

ころで着地する。もちろん、俺も相手にばれないようなところから追跡を開始する。

相手を仕留めたいのなら氣の緩んだ瞬間…つまりは餌にありついでいるときに背後から襲えればいい。逆に話し合いで解決したいならば襲いかかる前に普通に声をかけることだ。声をかければ狙われている人間も助けられるし、未知数の吸血鬼を前にして食事を取り始めるとは思えない……と、親父は言っていた。

しかし……どこかで見た事があるような後ろ姿だな。白衣なんて着てるし……。

吸血鬼はターゲットの五十メートル近くまで接近している。そして、小走りし始めた。俺もそのあとに続く。まだ、声をかけるには早い。

「須黒さん

「……はい？」

吸血鬼に声をかけられた少女は後ろ……つまりはこちらを振り返った。まるでパイナップルみたいな頭をした少女は白衣の吸血鬼を目に入れた後、電柱に隠れていた俺に視界を映して信じられないと言つた表情をした。

「須黒さん、今日ライブがあるんでしょ？先生、応援してるから頑張ってきてね」

そして俺は白衣の吸血鬼が誰だかようやく気がついた。俺の担任で、部活の顧問だ。

吸血鬼は玉富先生だったのだ。

第十九話

吸血鬼が死んだとき、当然ながらKKKの名簿から名前を消される。寿命以外の場合、出来るだけ死因をはつきりさせるために調査員が死に場所に赴くのだ。その後は吸血鬼の研究員に引き渡されて身体をいじくりまわされて家族の元へ送られる。もつとも、火葬されて骨の状態になつて帰るそうだ。

現代の吸血鬼は昔の吸血鬼の上に成り立つてゐる。まあ、これは人間の方もそうなんだろうし、最近の吸血鬼は自分が吸血鬼つて言う自覚が足りていないと何とか。ちなみに、人間に前例のない被害を出した吸血鬼は……

爆発し、俺の衣服は吹つ飛んだ。まあ、身体が丈夫なだけであつて服とかは丈夫じゃないからな。辛うじてパンツがくつついているからいいものを……これが無くなつたらモザイクは要るだろ。

手に握つていたドアノブを虚空に投げつける。そのまま星になつてしまつた。

「貴様、何者だつ」

少々おびえた感じの声だつた。そりやそうだらう。仕掛けていた爆弾が爆発したなら普通の人間はそれは言葉で表現できないような状態になつてゐる。しかし、いざ見てみればモザイク一歩手前で何ともない生徒がいるだけだ。

「いやいや、俺は怪しいものじゃないですよ。この時間帯、いつも屋上にやつてきて『青空なんて嫌いだよ、バカ野郎』つて言つてゐるただの不良生徒です」

ちなみに今の天気は曇りだ。相手もちらりと上を見て『青空じやねえぞ』と目で訴えかけているがそれどころではない。

物騒な代物（おもぢや）ではないと思つ）を俺に向けたまま、相手は口を開いた。

「両手をあげる」

「もつやつてます」

既にあげでいたりする。用意のいい男なのである。

「口答えするなつ」

「落ち着いてください。本当にただの生徒なんですよ。ほら、俺の脚を見てください……震えているでしょ？」「」

相手の視線は俺の不自然に揺れまくっている一つのあんよを見てから納得したようだ。

「じゃあこちらに背中を向けて止まれと言つまで歩いてここへ言われた通りに相手に背中を向けてから一歩一歩後ずさる。」

「止まれ」

「はい」

天に突き上げた二つの手を相手に縛られる。まさかこの歳で縛られるとは夢にも思わなかつたな。そろそろ頃合いだろ？

「よし」

男はしつかり縛つたつもりなのだろう。何度も何度も確かめてから今度は俺の両足に取り掛かろうとした。

「……ちゃんと縛らないと危ないですよ、おじさん」

ロープを引きちぎつて後は一瞬のすきを見せた相手の鼻つ面に素晴らしいストレートをお見舞いする。ちなみに相手が吸血鬼だったカウンターを喰らうこと間違いなしである。そういうえば昨日、決闘方法が変わつたとか何とか電話があつた気がする。

「さて、ところどころどうするか、だよな……」

学校を襲つた謎の連中を倒した勇敢なる生徒、俺。

「一人で危ない連中に打ち勝つなんてたくましい！彼女にして！」「ずるい、あたしのものよつ！」

そんな未来が簡単に予想される。

しかし、潜入調査的な事をしている為に有名になるのは非常にまず

い、ケチャップにマヨネーズ、ナツメグ、鷹の爪、からしを少々入れるぐらいますい。誰かが連絡したのか校門側からサイレンの音がなっているところをみると屋上での爆発音を間違いなく言われるだろい。

とりあえずのびでいる男をロープでしつかりと縛り、転落防止用のフェンスにぶら下げておいた。一応、命綱を付けてるので安心して欲しい。

「やっぱり逃げないとまずいよなあ」

中学生のころにこんな事があつたのなら間違いなく顔を出して英雄を気取っていた。

さつさと人影の少ない裏庭へと飛び降りて近くの窓から侵入。男子トイレに籠る。

「さて、後は事の成り行きを見守る事にするか」

学校占拠事件は結局頭のおかしい人たちによる犯行だと言う事になつた。生徒に被害は出でおらず、俺が気絶させたのが全員。しかし、校舎には結構な傷が残つてしまい屋上は立ち入り禁止、一部破損した壁などにはブルーシートがかけられることとなつた。夏休みに入つてから修理するらしい。

たつた一日の臨時休校でそれからまた学校。俺と千華は共に登校していた。

「びっくりしたよ。だつて屋上に続く階段がいきなり瓦礫で塞がれて、警察官の人たちと一緒に突入したら義人君、いないんだもん」

「飛び降りたんだよ。あそこで俺がいてもまずいだろ」

「え、なんで」

「そりや……」

説明するのが面倒だ。千華相手にばれたら面倒だの何だの伝わるかどうかも怪しい。一生懸命説明してもきっとその素敵な脳みそで変な理由に改ざんされるはずである。しかし、最近は大体コツを掴

んできた。

「ヒーローは姿を隠すものだろ」

「それもやうかあ」

「それよつこめんな、せつかく作ってくれたマント、台無じにしち
まつて」

爆発に巻き込まれたマントは無事ではなかつた。まあ、それを言
つたら他の衣服もそうなんだけどな。

「大丈夫だよ。こくらでも作つてあげるつて

「そつか

「うん、楽しみにしててね」

てつきり怒られるとばかり思つていたがよかつた。でも、変な話
だよなあ……黒幕とかそんなのがいるんぢゃないんだろうか。

第十九話・ち・深読み（後書き）

予定話数は30。つまりあと約10話分。ちゃんと終わることで
きるのか、それとも今みたいにぐだぐだで幕を引くのか……次回、
偶数話です。

第二十話・み・推理物

第二十話

「…犯人はあなたです、間山寛太さん。あなたは恋人を殺されて憤る若者を演じていたようですが、ストーカーが設置していた監視力メラの前では演じる事が出来ていなかったね」

殺人事件が起こってから四日。一度は犯人を間違えて危うく逮捕しそうになつた警察は驚いている。

「な、何を根拠にそんな事を……第一、俺にはアリバイがあるじゃないか？」

「そうだぞ、彼は君と一緒にいたんだろう？」

「ええ、確かに一緒にいましたよ……彼は笛を吹くだけでよかつた」「笛？」

「犬笛です。間山さんの飼つている犬は全部で四匹。偶然笛を見つけたあたしがそれを吹いた時に来た犬は三匹……一匹を探したらね、裏庭のところにいたんですよ。何かを探していたんです、それが事件を解決するきっかけでしたよ」

推理小説だけに犯人が存在するとは思えない……いや、冷静に考

えてみたら『羽津町吸血鬼事件』だから一応事件っぽい扱いか。

ともかく、だ。俺が先日見たのは紛れもない玉富菜穂子先生の姿だつた。俺が知つている限りでは人間が空を飛ぶことなんて出来ないかもしない。

「今なら……この屋上から飛べるかもしない」

なんていう奴がいたら止めておいた方がいい。後に警察と消防、どつちに連絡をいれたらいいかと迷わなくてはいけないはずだ。

率直に『先生がこの吸血鬼事件の犯人なんですね』と問い合わせるのもどうかと思う。何せ日本中に吸血鬼が住んでいるのだ。犯人は

眼鏡をかけて小太りだった……なんてそりゃじゅうにいるだらうからな。

というわけで、俺は放課後生物室で電話をかけていた。相手はもちらん、親父である。

幾度かの「ホール音」の後、親父の声が聞こえてきた。

『義人か……犯人を見つけたのか？』

「羽津町に玉宮菜穂子って吸血鬼が住んでいるかどうか調べてほしいんだ」

『……わかった』

寝むそうである。多分、この電話で起きたのだろう。昔の吸血鬼たちは昼間に寝ている。親父はちゃんと地下室にそれっぽい雰囲気を作つて（クモの巣を作るキットをこの前購入していた）古臭い棺桶の中で眠っている。まあ、ここ数十年に生まれた吸血鬼たちは昼にも不遜に動ける体制を持っている為に一週間に一度、昼寝をする程度で十分である。

『わかつたらこっちからかけなおす』

「親父、頼むぜ」

電話を切つてふと背後に人の気配があつたので振り返つた。

『……誰と電話してたの』

そこにいたのは須黒美咲。いつものように前髪で顔が隠れ、井戸から出でくれば完璧であろう……夏になつたらおばけの役でひと稼ぎできるかもしね。

「俺の親父だよ」

「……そう」

「なんだか元気ないな」

いつも暗い感じのする少女。最近になつてよつやく雰囲気がわからよくなつてきたからなあ。この違いは違いの分かる男ではないと気がつかないだろうな。

「昨日、ライブに来てなかつたね？」

「ん、ああ用事が出来てな……というか、なんでお前が知つてるん

だ？」

「え？」

「は？」

お互に何か勘違いしているようだ。須黒のきょとんとしている顔は新鮮でまだ見たかったけど、そろそろ先生が来る時間帯だから

からな。

「オーケー、お互にすれ違っている感が否めない。一つ一つ整理

していこう、それが心中に潜むはてなを消す作業だから」

「…………うん」

「よし、じゃあまずはあれだな。なんで俺が昨日行かなかつた事を知つてゐるかだ……もしかしてあの場所にいたのか」

須黒が駅にいて俺を見たのなら行つたと勘違いしただろうな。ライブ会場にいるわけもないな、俺の申し出を断つていたし（実は俺に内緒で行つていたというのならショックである）、万が一にいたとしてもわからないだろうし。

「それは……」

「何か言えない理由があるんだな」

「…………もしかして、気付いていないの？」

「何をだ」

「私の事……」

「は？ もしかして須黒はライブに行つていたのか」

正直、ライブに行つておけばよかつたと後悔している。朝なんてクラスメートたちの間ですつごく騒がれて『興奮した』とか『すつづけーよかつた』とか俺も興奮したかつたぜ。

俺はぼーっと窓の外を眺めてからため息をついた。

「そりやないぜ須黒。俺と一緒に行こうつて言つたら用事があるとか何とかかんとか、いやがつたじゃないか」

次の瞬間、俺の頬に鋭い何かが当たつた。

「……ひぶひん、もうこいよ」

何がにぶちんなのか、これはあれだろ？か…ヒロインが主人公に恋心を抱いていて勘違いに業を煮やしたつてことなんだろ？か。いや、違うな。そんな事は一度もなかつたし、何か俺の方が誤解しているようだ。

もうこの話題を須黒の前でしないほうがよさそうだ。俺は話題を変える為に別の話を振る事にした。

「そういえば、昨日先生が真由りつにちゃんと話してくるといふを見たんだ……うおっ」

よほど俺の事が気に食わなかつたらしい。再び俺の頬を狙つた張り手は難なく避けられ空を切る。

「……」「ど、どひしたんだよ。そんなに怒つて……まずは落ち着こひせ」

「ふいっとそっぽを向いてそのまま部屋から出て行つてしまつた。

「……何なんだよ」

女の子ってよくわからなーいな。

追いかけようかなつて思つた時にちょいと携帯が鳴り始める。親父からだ。

『義人、調べたぞ』

「あー、どうだつた

俺は気が付いていなかつた。自分の背後に一つの影が近づいていた事を。

第二十一話・ち・友達がやつてきた

第二十一話

普通の人間を吸血鬼にする方法なんて腐るほどある。ただ、あまり実行する輩は多くない。たとえばある程度血を抜いた人間に吸血鬼の血を輸血していればその人間は吸血鬼になる。リスクの事はとりあえず置いておくとして、晴れて吸血鬼になつた人物はそれからある程度試練を乗り越えねばならない。まあ、あくまで日本の場合である。

NKKへの登録…これがまた大変で経験を書いて適性試験（日光に對しての抵抗力など）を受け、吸血鬼の知識を頭に叩き込んだりしなければならない。空を飛ぶこともしなくてはいけないのだ。まあ、そういうた面倒な事が出来ない吸血鬼には悲惨な道しか残されていないから世の中甘くないなと思うね。

転校してきてもう落ち着いてきた。クラスメートと仲がいいと言わないまでもそれなりに話しが出来るようになつてきているし、もう転校生と言うよりもちゃんとした生徒として扱われている気がする。

吸血鬼の搜索も地味に続けていたりして最近では『この町にいないようだ』という結論に近づきつつある。今日も三十分間（最初は一時間近く探していたものだ）

「というわけで、今日は義人君の家に行くよ」

「なにがというわけで、なのかは知らないが……」

「うーん、だつて行つたことないし、面白そだからさ。吸血鬼の家とか見てみたいもん」

おもしろくもないし、特別何があると言うわけではない。しかし、仮にもKKK理事の息子だからな。『吸血鬼のイメージを壊しては

『ならない』をがんばつてみようとも思う。いや、普通に高校通つている時点で壊れたとかいつちや駄目だぞ。

「んじゃあ、行くか」

「うん」

女の子を自分の家……じゃなくてねぐらに連れていくのが来るのは思わなかつたな。これもこの町にやつて来れた事に感謝だな。女子にモテル男はつらいそうだ、しかし、モテない男の方が辛いのである。

女の子での悩みを相談されたところで答えられない、というか、自慢話だろそれ。

「なあ、大仁、おれ……三角関になつちまつたつて言つか……」

今日の昼休み、俺は縁川に辞書を投げつけてやつた。

ともかく、彼女も女友達もないやつにそんな相談するんじゃねえよ、全く。千華と一緒に歩きながらリバーサイド満開を目指す。「へえー、リバーサイド満開ってところに住んでるんだね」

「変な名前だねえ」

「俺もそう思う」

もし、千華が『すつじいかつこいい名前だね』とかいい始めたら友達やめよっかと真剣に考えていたりする。

「意外と狭いんだね。もうちょっとといい部屋に住んでいるのかつて
思つてたよ」

自室には色々と調査資料なんかが散乱しているし、足の踏み場がないから辞めておいた方がいいだろう。

「やつぱり棺桶で寝たりするの？」

「この前買い換えたからなあ……棺桶って言うより木の棺だな。顔

の部分がぱかって開くよつたタイプ」

「ふーん、なんだかイメージ崩れるよ」

「……」

「」の事が親父に知られたらどうなるだらうな。

「で、お茶と「コーヒー」ぢつちこあるへ。」

「トマトジュースはあるの?」

「え、ああ……」

これもまたイメージの一環の為に準備されている。とりあえずイメージを保つために赤い飲み物は必然的にトマトジュースしかないからな。小さい頃から親父にのまされてきたから好物の一つだ。

「ほれ

コップになみなみに注いで自分の分を湯のみの中に入れる。

「……そ、それ……」

「ん、どうした」

信じられないと言つた表情、何かは知らないがかなり衝撃を受けているようである。

「ワイングラスは?」

千華がいいたい事等すぐにわかつた。

「……あ、ああ……ちよつと今ワイングラスは割れちゃつてないんだよ。こつもはワイングラスで飲んでるから安心しろよ」

「そつか、そうだよね」

「そりゃそうだろ……ははは……はあ」

正直、固定イメージを持たせる原因となつた吸血鬼を退治したいと思つてゐる。まあ、もう死んでいるけどな。

「ところでさ、この町の吸血鬼を捕まえたら義人君はびいづするの?」「びいづするのつてびいづこう事だよ」

「そのままの意味だよ。だつて、悪い吸血鬼を退治する為に来たんだよね」

「ああ」

「用事がすんだら転校しちゃうのかなあつて思つたの

「うーん、さあなあ」

親父に聞いてみないことにはよくわからないな。人手が足りていないなら俺も手伝わざる負えないだろ？けどそりゃないな（こ）の町に居座る事になるだろ？

「で、どうなの？」

「何とも言えねえな

「そつかあ…」

「どうしてそんな事聞くんだよ」

「そりゃ、義人君とは友達だからだよ。それにあたしの趣味の事を一度も馬鹿にしたことないし、からかったこともない……そして何よりヒーローだからだよ」

「……ヒーロー……ねえ」

何一つとしてヒーローっぽい事はやつてないと思うけどな。放課後やつていた調査もただの聞きこみだし、新たに事件を防いだというわけでもない。

ただまあ、本人と周りの見解は違うようで千華は俺の両手を握つて熱っぽく語るのだった。

「だつてさ、だつてさ、最初あつた時も宙に放り投げられたあたしをキヤッチしたし、この前の学校占拠した怪しい人たちを一人で倒しちゃつたじやん」

「うーん、そりゃそうだけどな」

小学生達（装備、海パン一丁）が学校を占拠、それを大人一人（完全武装）が解決するなんて簡単すぎるだろ？

「あたし、大きくなつたら義人君を主題として何かお話を考えるよ。

そして日曜朝七時くらいから放送するから

「……そりゃ楽しみだな」

せつかく女の子が一人暮らしの男子生徒の元へとやつてきたといふのにそんな話ばっかりで時間が過ぎてしまった。千華を背中に乗せて送り届け、充実した（？）一日は過去のものとなつたのだった。

第二十一話

『義人、お前の言つていた人物の事だが…』

「親父、こっちからかけなおす。場所がちよつと悪いからさ」
さすがに部室でこれ以上の電話はやばいだろ。さつきだつて下手したら須黒に聞かれていた可能性があるので。今度は先生がやつてくるかもしれないからな。

電話を切つて部室から出ようとすると先生と鉢合せした。

「あら、大仁君…どこに行くの？」

「え、あ、ちよつとだけ用事があつて…親父に電話しようかと思つて…失礼します」

先生を避けて廊下に出ようとしたら…が、先生が俺の前に立ちはだかつた。それはもう、超える事の出来ない山のごとき威圧感である。

「「めんねえ、先生ちよつと聞いたやいけない事を聞いたやつたみたいでさ」

携帯電話を持つている手の方を握られる。握力は人間のそれとは違い、プレス機に挟まれたかのような力である。リンクなんて軽く握りつぶす事が出来るに違いない。

抵抗したら俺の手がすりおろしりんごになる事間違いない。

「せ、先生、どうしたんですか」

「どうもこうも、ちよつと大仁君に見せたいものがあるの。着いてくるわよね」

有無を言わせぬ響きがある。『着いてくるわよね』の短い言葉の中には『着いてこない場合はそれはもう恐ろしい体験をさせてあげるわ』といった意味が含まれているようだ。

相手の考えがわからない以上、従うしかない。いつの時代だつて力のあるものが無い者たちを支配してきたのだ。今だつて気付かな

いだけで変わりもしない……まあ、長いものには巻かれりつて言葉もあるからな。

「え、ええ……」

「変な事をしようとしたら……」

「しませんよ

「よひしー」

玉富先生は俺の首根っこを捕まえると左右にちょっとだけ振った。その動作はあるで缶ジュークの残りを確認するかのようなものだったが、俺からしてみれば首が折れるかどうかの一歩手前だ。もちろん、人間のそれとは強度が違う。戦車の砲台を握つて振り回し、それをぶつけられたつて大丈夫なぐらい丈夫なんだぜ。でもまあ、今じや気分次第でやられるかもしねない。

「さ、行くわよ」

あらうことが窓から飛び降りた。此処は三階である……といつても、俺と先生は怪我することなく着地で来たわけだけどな。

未だ先生につかまれている俺は校舎裏のシミを見せられる。

「えーと、これは何ですか

「血で出来たシミよ。もつとも、その血が流れていた吸血鬼はこの世にいなけれどね」

「え、そんな馬鹿な……」

吸血鬼の血は日光に当たれば煙を出して消える。日の当らないような場所ならちよつとぐらいなら残るかもしねないがここまで綺麗に人型に残る事はない。

首を掴まれた状態でその血のシミを触つたりしてみた。校舎の壁を触つているだけで、手に違和感は一切ない。

不思議に思う俺に先生は愉快そうに言つた。

「……あなたのお父さんから詳しい事は聞けばいいと思つけど、先生は吸血鬼の研究者なの」

「……は

「私はNKKにいるのが嫌になつて今は一人で行動しているわ。こ

うやつて世間を騒がせている吸血鬼事件を追つてＮＫＫの派遣員が来る前にその吸血鬼にあれこれするのよ」

あれこれって何ですかとは聞ける雰囲気ではなかつた。下手したらこれからあれこれされるかもしれん。嬉しそうなあれこれならともかく…十中八九身体を傷つけるようなあれこれだらうな。「それでね、それまで吸血鬼が起こしていた事件を先生が続けてＮＫＫの派遣員をおびき寄せるのよ」

「……」

「」の場合、おびき寄せられた派遣員つて一体誰の事になるんだろう…なんて言えたらどれほど良かつただらうか。

暴れた瞬間に先生は俺の首をちょっとだけひねるだらう。情け容赦のない冷徹な雰囲気がいつも優しそうな雰囲気とのギャップの激しさで俺の脳天はしびれまくりである…すまん、自分で何言つているのかよくわかつてないぞ。

「…えーと、つまり先生は俺の身体を使って実験しようつてことですか」

「よくできました、その通りよ」

「……」

絶望的である。『うううピンチの時に誰かが助けに来てくれるんじゃないんだろうか。淡い期待を寄せて眼だけ動かしてみたけど、どこにもヒーローはない。』

しかし、俺が可哀想なモルモットになる事もなかつた。

「残念ながら大仁君は平均より少し下のレベルだから使い物にならないわね」

「え…」

「先生が必要としているのはとても能力の高い吸血鬼なのよ。耐久度も高くないといけないんだけど、最近の子はやっぱり身体的にも弱くなつてきているみたいだし、駄目ね」

助かつた…何だか嬉しくないけどな。取るに足らない相手だから見逃してくれると言う事だらうか。

「見逃してくれるんですか？」

「うーん、そうね…大仁君がＮＫＫに報告しないのなら見逃してあげる」

「…本当ですか？」

俺の質問に対しても先生は頷く。

「本当よ。だつてここで大仁君がＮＫＫに連絡しなかつたら手に負えない大物が派遣されるに違いないもの」

そんな怖い人物がいるのかよ…知らないなあ。

「ともかく、大仁君が変な事をしなければ私も襲つたりしないわ」

先生は俺を解放してくれた。もつとも、強大な力を持つ吸血鬼が近くにいる事実に変わりはない。俺程度の吸血鬼なんて瞬きの間に大変な事になる可能性が高いのだ。ほら、あれだ。お猿さんが手の上に小便引っ掛けるような話みたいなもんだな。

「ああ、そうそう」

さつさと逃げ出したい俺にまだ用事があるらしい。

「ＮＫＫには残念なお知らせだけど今回私が追いかけている吸血鬼は二人いたのよ。一匹はこの通り、平らな姿になつたけどね」

指差す先には血のシミが…俺も下手したらああなるんだろうな。

「つまり、もう一人はまだこの町にいるって事ですか」

「多分そうね。まだ匂いをかすかに感じるもの。もちろん、私の手足となつて大仁君には働いてもらうわ」

嫌だなんて言つたら頭の中に電極埋め込まれて操られそうである。

『勇気を持つてNのと言おう』

学校の掲示板かどこかで見た言葉だ。言えるほどの力を持つていない自分が悲しい。でもまあ、考え方によつては強力な助つ人を得たようなものだから調査は渉るつてことなんだろうか。

「じゃ、明日から須黒さんと協力して吸血鬼捜索してもうつわ」

「え…」

「大丈夫、吸血鬼の事に関しての部活だからなんらおかしな問題点はないもの」

「そういえばそつだつたなあとため息をつけるほど心に余裕はなかつたりする。」

第一十一話・み・学園物（後書き）

冒頭、ちょっとした小話を書いつとして気がつきました。これは本編よりも長くなりすぎているや…。結果、削除。この作品 자체が学園物みたいなものだから今回はいいかなあといつことで冒頭はありません。前書きに書いていないのは読むまでに一ページ分増えますからね。面倒でしょうし、あとがきなんて滅多にないから誰も読んでいないという理由からです。さて、奇数のほうもそれなりに話が進みます。

第一二二話・ち・一人の仲を裂くもの

第一二二話

吸血鬼つて一体何だらうかと思つた事がある。人間の進化した姿なのか、それとも人間とは別に進化してきたものなのか考えた事があるのだ。それらの質問はＮＫＫの研究者にぶつけてみた……まあ、新たな問題提唱したおかげで会議は俺の質問のせいでつぶれ、色々と問題になつた。結局、亜人間的立ち位置で一旦落ち着いたそうだ。それならこの世界に狼人間とかいてもいいんじゃないかと思うんだけどまだ見かけたことはない。

「狼女の彼女が欲しいな」

なんて事を親父がいつていたのを思い出したぜ。

千華に『狼男の知り合いはないのか』なんて言われたからちょっとだけ笑つてしまつた。

「居るわけないだろ」

「えー、それつて不公平だよ。だって、吸血鬼はいるんだよ?」

「いや、うーん、なんて言うんだろう。でもさ、冷静に考えたら満月を見て狼になるなんて絶対におかしい」

校舎裏にわざわざ呼ばれたからこれは告白される素晴らしいシチュエーションじゃないだらうかと考えた自分が浅はかだつたな。なんで俺は狼男の話なんてしてるんだ。

「んで、俺を呼び出した理由はなんだよ」

「あ、忘れてた……これだよ、これ」

未だ校舎の傷は癒えていない。凹んでいるところはブルーシートで覆つていたり、一部の階段が使用不可。屋上にいたつては瓦礫が撤去されてから雨漏り防止のために早速工事が行われている為立ち入り禁止となつていてる。

そして、校舎の裏にもブルーシートがかけられている場所があつた。

「「」がどうかしたのか？」この前の事件のせいだろ」

「ううん、ここは違うんだよ」

千華はブルーシートを剥がし始める。

「おいおい、いいのかよ」

「大丈夫だよ、壊れているとかそういうのじゃないから。大体、あたしがしたんだから」

ブルーシートがめくられるといには人型の不気味な赤いしみがあつた。

「……なんだ、学校の七不思議みたいなものか……高校にもあるんだな。で、これがどうしたんだよ。吸血鬼がいるなら七不思議も現実に起こつうるとかそういうのじゃ……」

「そうじやないよ。義人君なら冷静にこの血が何の血なのかわかるかなつて思つたんだよ」

吸血鬼と言えど風雨にさらされている血を舐めたいとは思わないなあ……。

「もうちょいで夏休みだな」

「うん、そうだね、さ、はやく。じめじめしてるとか早くなめないと味がなくなつちゃうよ」

味とか残つてゐるのかよ。

はあ……最近、千華は俺の事を警察犬か何かと勘違いしているんじやないかつて思うんだよなあ……。女子のブルマ盗んだ犯人を探しだすのに俺の嗅覚を使つたり、ひつたくりを捕まえるように俺に指示したりして……。

「さ、早く」

「……わかつたよ」

ちょっとだけ壁を抉る。そこで違和感を感じた。抉った壁の中も真つ赤なのだ……血が壁に浸透するなんてありえるんだろうか。

ともかく、血を舐めてみる事にした。

「で、どうかな」

一言曰にまづいといいたい。一度舐めたら絶対に忘れないあの味

がした。

「……こりゃ吸血鬼の血の味がするなあ……基本的に日に当たれば血が無くなっちまうんだが……日当たりが悪いから残つていたつて言つにもちよつとおかしな点はあるし……血液量からするとビリも」の血の持ち主は死んでるよつだな……千華は「」のシリコツ見つけたんだ

「うーん、一週間ぐらい前かなあ

「一週間か……なんですぐに俺に教えてくれなかつたんだよ

「だつて、義人君『テストがやばくて遊んでなんかいられない』つて言つてたじやんつ」

「あ、あー、そつだつたか

吸血鬼と言えど、テストは重要である。だつて、赤点とかとつたら夏休みにたくさん補習とか入つちやうんだけ。

「ともかく、俺が追つていた吸血鬼のものつて考へてもおかしくない……つてわけにはいかないな

何より日が当つて消えない血なら何かしら意味があるはずだ。

「」の血の事は専門業者に頼んで調べておこつてもいい

「じゃあ今日の調査は終わりだね

「そつだな。そろそろ帰るか

明日の朝『昨日青木さんに告白されたね』とか言われたら日も当てられない。一人で壁の血を眺め、あまつさえ片方はそれを舐めるとかどうかしていると思われるだろ？

「ねえ、義人君

「なんだ」

「この後あたしの家に来ない？」

「ん、ああ……別にかまわないと」

「そつか、じやあ決まりだね」

以前行つたときは何やら妙な事が起つていていたからな。家族全員がかちやかちややつていて少し怖かつた。

「」つして俺は再び青木家に向かつ事にしたのだった。

下校中に特にこれと言つて面白い事は起きたなかつた。甘酸っぱい青春ラブコメ的な（突如として俺の事を好きになつた美少女がラブレターを渡しにやつてくるも、その光景をみた千華が怒つてなだめよつとした俺とけんかになつてすれ違いイベント的なそんな感じ）展開も起きず、謎の侵略者が沸いて出でてくる」こともない。

「せうそつ非日常的な事は起きたないんだな」

「うーん、あたしから見たらこうやつて吸血鬼と一緒に歩いて帰つていること自体がちよつと血饅頭できるような事だけ。あ、でも日常的な事だからやつぱり非日常的なことなんて起きないよね」

当たり障りのないような会話でそのまま千華の家までやつてきた。

「ただいまー」

「お邪魔します」

居間では青木家の面々が人生ゲームに興じていた。

「あちやー、借金地獄だ」

「株価が暴落したあ」

「スタートに戻されたわ」

「ほ、牧場行きじゃと…」

帰つて来た娘の事にも気が付いていないようである。千華はため息をついて俺の方を見た。

「気にしなくていいよ」

「そ、そつか」

真剣そのもの、その日は何かを捕らえるようにルーレットを回し始める。それが止まる前に千華は俺に言つのだつた。

「部屋で待つてて」

「わかつた」

女の子の部屋に一人で入つていいものかと思いつつ、千華の部屋にある戦隊物のポスターを思い出してそんな事を考えた自分が恥ずかしくなつた。

「相変わらずすごいな」

遊園地のヒーローショーで手に入るようなサインが数枚飾られているのは相変わらずだ。ふと、机の上を見ると緑川に撮つてもらつた俺とのツーショットが置いてあつた。地味に嬉しい。

近くに置いてあつたヒーロー年鑑を拾い上げてめくる。そういうば小さい頃は俺も欠かさず見ていたものだな。今じゃ、怪人役の人は大変なんだろうな…といった同情の眼差しで見てるけどな。数ページめくつたところで扉の開く音がした。

「千華……つて由香ちゃんか」

「こんにちは」

あまり話した事のない少女だ。初対面で俺のベルトを触つてくるようなところをみるとこの子も姉に感化されている可哀想な少女の一人かもしれない。

しかしそれ、今日はどうかしたのだろうか。そのあどけない顔に何かしら決意したような色をにじませている。

近くまで歩いてくると何故かあぐらしている俺の上にのつたのだ。髪から漂つてくる匂いがいい匂いでグッジョブである。

「ん、どうかしたのかな」

俺が幼子好きだつたら今頃この子は大変な目に会つていただろうな。まあ、アイドルのひとつこちゃんが好きとかそういう時点で変な目で見られるしな……そういうえばひとつこちゃんがアイドルやめちゃうかもしれないとか噂が…

横道にそれ始めた俺の耳に由香ちゃんの鈴の鳴るような声が届く。

「あの、吸血鬼なんですね。だったら私を吸血鬼にしてください

「つ

す」「ショックを受けた。どのくらいショックを受けたかと言つと百点と信じて疑わなかつたテストの問題が一つずつずれている事

にラスト一分で気がついたときみたいだな。あれが小テストでなければ今頃俺はどんな目に会つていた事だらうか。

「由香ちゃん、ちょっと落ち着こうか。君は今ほんのちょっと、そう、微々たるものだけど錯乱しているんだ」

「私は普通です、真剣なんです……さ、どうぞ」

そう言つと上着のボタンを外し始めた。首筋の白さがなんだろうか、吸血鬼としての『噛みたい』とかそんな欲望をかきたててくれるのだ。いや、しかし、友人の妹だし……。

「じめーん、ちょっと遅くな……つた」

がちやつと扉が開いて元気よく千華が入ってきた。のはよかつた。ただ、千華から見たら俺が妹の上着を脱がせて、妹は何やら必死に目をつぶつているような状況である。

「…………何、してるの」

先ほどの元気はどこへやら、代わりに親の仇でも見つけたような声を出し始めた。俺は生まれて初めて、ただの人間が恐ろしく見えた。

「か、勘違いしてるだけだつて。まだ何もしてねえよ」

「…………へえ、まだ何もしてないんだあ……これから、どうあるの」

「どうもしないって」

やばい、やばいぞ……下手な事をいつたら泥沼に陥りそうだ。

そんな時、由香ちゃんは立ち上がりと上着のボタンを止めて部屋を出て行こうとした。

「あ、ちょっと由香」

「…………義人さん、続きは今度やりましょ」

ほらまた、そういうた変な勘違いを残して行つちやうとか本当、俺が何か悪いことしたんだろうか。

やはりというか、その言葉が止めの一撃となつて俺はすぐさま青木家から叩きだされた。ほっぺに手形と言つお土産までもらえた。

「…………こんなすれ違いとか嫌だぜ、本当」

神様なんていしないんだな……そういう事を改めて思い知らされた。

しかし、どうして由香ちゃんは俺が吸血鬼だって言う事を知ったんだろ？…まあ、どうせ千華が口を滑らせただけなんだろうけどさ。

第一一十四話・み・昔話

第一一十四話

昔々あるといいににおじいさんとおばあさんがおつたそつな。おじいさんは山へお刈りに、おばあさんは川に洗濯にいつものように向かうとある日、河の上流から吸血鬼が流れて来たそつな。

「こりゃ大変じゃあ」

おばあさんは……あー、駄目だ。

「俺に文才はねえよ」

「……うん」

そんな率直に言つてくれるなよ。ちょっとぐらいは『そんなことはないよ、義人君の文章は味があつて私は好きだな』とか気のきくような……まあ、もういいけどよ。

なんでこんなことになつたかと『うつ』と信じられないことに吸血鬼搜索を続けていたら幼稚園の先生がみたとか何とか。なんでそんな事を聞いてくるのかと言われて俺がとつさに『実は高校の部活で吸血鬼を題材とした創作昔話を作つてまして…なんぢやら』といつた感じである。創作昔話の時点で怪しい匂いがふんふんしているはずだ。

でもまあ、先生の人柄がよかつたのかあつさり納得してくれてあまつさえ『では出来上がつたら子供たちに聞かせてあげてくださいね』と言つてくれた。

「…あのとき、新聞部です。事件が最近起つていないので調査しているんですつて言えればよかつたんぢやないかな」

「あー、そうだな。後から考えたら俺もその答えにたどりついたよこれまでただ漠然と『吸血鬼はこの町にもういらないんだなあ』つて思つていたけど、先生が吸血鬼で、さらにもう一人吸血鬼がい

るとか変な状況になつていいのだ。それに先生は俺の事を手足のようにはつていいし、嫌だとか言つたらひどい目にあいそつてある。既にあつていいとかは秘密だ。

「…私が考えようか」

「うーん、いや、俺が引き受けたようなものだから須黒には出来た話を読んでもらう事にする」

須黒に頼んだらおどろおどろしい話が出来上がり子供たちがちびりそうだ。何せ、あそここの園児達が須黒を見て震えあがつていたからな。

「…でも、事件の犯人も探さないといけないんでしょ」

「そりなんだよなあ…ともかく、吸血鬼の話の方は少しの間だけ保留つて事で何か手掛かりになるようなものでいいから探すつてことでどうだ」

「…うん」

「…兎追つものはなんとやらだ。

生物室のテレビを付けてニュースでも見ることにした。先生はどうせいないし、この近くの廊下を通るわけでもないだろ。う。

須黒に何かの話を振つても最近はなんとなく溝があるからな。用事が無いと話しづらいんだよ。

『本当に残念ですね。真白いつこさんがあいだるをおやめになるとは』

「嘘…」

テレビの右上の画像はりつこちゃんそのもの。テロップには『衝撃の引退』と銘打たれていた。

『前々から噂になつていてましたけどこの前のライブが本人にとつていまいちのものだったようですね。出す曲自体は売れていたようですが、本人を満足させる出来ではなかつたというのが所属する事務所の見解です。』

『か、会見とか一切なく…FAXで引退とか何があつたんだ…』

何か変な追っかけのせいで苦しんで辞めたとかそんな理由な

ら俺が排除してくれる。一体、どこのどいつがいつこりやんをここまで追い込んだんだ。

「す、須黒……お前、知つてたか」

「……うん」

普段より少しだけ長い間。しかし、今はそんなことどうでもいい。この前のライブは絶対に見に行くべきだった。

「最近ついてないぜ。先生には面倒なこと押しつけられるし、仕事が終わったと思ったらぬか喜びだつたし、拳銃ひとつこちやんがアイドルをやめてしまうとは……」

「……やっぱり、やめたらまずかつたかな」

「そりやまあ、さうだけどな。でもりつこちやんにも何かしらの理由があるんだる。誰にだつて理由はあるからしちゃうがない」「義人君はまた新しいアイドルを応援するの?」

須黒の質問に俺はすぐさま首を振った。

「そりやないな。こっちにも色々とあつてだな。えーと、口のフイーリングと言うかなんと説明したらいいか……ともかく、りつこちやんのような子はなかなか出てこないだらうしな」

吸血鬼の心を搖さぶられるようなアイドルは今のところひとつこちやん以外にいないのでどうしたもんどううな。

俺の言葉をどうとつたのか知らないし、あまり意味もないだらうけど須黒は嬉しそうだつた。

「……そつか、そつなんだ」

大体俺はミーハーじゃないからな。テレビに出るようになつてファンになつた」とか反吐が出るぜ。あと無駄に多いのは必要ないだろ。人気が出て後でばら売りとかよくあることだけ残念な話だ。

「……あのさ、義人君」

「なんだ」

「今度の土曜日、此処にきて」

手渡された紙には住所が書かれているだけだつた。

「土曜日か……」

「…うん、絶対」

「わかつたよ」

須黒が自己主張するなんて珍しいもんだ。休日も出来れば探してほしいと言われているけど、先生自身すぐさま発見できるとは思つていないうだからたまにはいいかな。

第一十四話・み・昔話（後書き）

奇数、偶数に分けたことを後悔しています。これならまとめてやつて後から別としてやればよかつた。最近は恐ろしいもので適当にケータイで写真を撮ろうとしたら盗撮疑惑をもたれて大変ですね。すつごくふとつた方がいきなり腕をつかんできて『今、私のこと盗撮したでしょ、したでしょつ』ってそんなことになつたら恐ろしいのなんの…これだけで何か話ができるほど、面白い話題ではありますけど。さて、終盤が近付いていますが、大仁義人はどういった結末をむかえるんでしょうが今更ながらタイトル名を適当につけたのも悔やまれます。『おひとよし』ってあだ名はさすがに言ひづらいですねえ。

第一一十五話・ち・人と吸血鬼のすれ違い

第一一十五話

吸血鬼は基本的に人間の事を餌としか見ていない……といった考えもある。まあ、前にもふれたけどそういうた考えが大半だろうな。それもいいだろうが、中には感謝している連中もいる。人間がいなければ滅んでしまうからな。何がいいたいかつて？いや、別に何でもない。

千華が俺の事をまるで虫けらでも見るかのような感じで三日が経つた。三日目、席替えがあつたのだ。くじを引いて番号順に並び変えつてやつだ。何とかこれでしのげるかと思つたのだが、まさかの展開になつた。

「…ふんつ

「…」

まさかの隣、隣ですよ奥様つ。確率的にすつゞく低いはずなのに誰かの思惑よろしく隣に来るとは思わなかつた。

まあ、みんなもそう思つだらう。そして、緑川が何やら一ヤ一ヤしてやがつた。

「よかつたなあ、手を出した妹さんのお姉さんが隣に来てさ。色々とやりやすくなつたんじやないの？」

「……お前、もしかしてくじに何か細工したのか？」

「ああ」

「てめえ…」

「おつと、気付けないやつが悪いんだぜ。なーに、どうせ青木の勘違いでそんな状況に陥つたんだろ？それならおれに任せろよ」

中途半端に話を知つていいようだ……と思つたらそれでもないらしい。俺の肩に手をまわして顔を近づけてくる。

「で、具体的にどんなことが起こつたんだよ？」

「えーっとだな」

吸血鬼の話の事だけは伏せておいてそれ以外はありのままに話した。妹がいきなり俺のひざの上に乗ってきて、上着を脱ぎ、そこを千華に叩撃されたのだと。

「うん、なるほどな」

「どうにかなるのかよ」

「ああ、ばっちりだ。成功しなかつたらおれのとつておきをお前にやつてほしい」

「……ほほう、よほど自信があるようだな」

「もちろんだ。その代わり成功したら何かおれにくれよ」

「いいだろ、俺のとつておきをくれてやる」

「で、それはなんだ？」

「……そうだな、どうせ失敗するだらつからりつじゅりんのデビュ

ー当時の写真集でどうだ」

「よし、これは頑張りがいがありそうだな」

「……いつがこれほど頑張ってくれるのは珍しい気がするな。期末とかもいまいち頑張つていてる感じがしなかつたし……まあ、当然だな。何せ今では手に入れようとしたら相当な額を要求されるからなあ。タイミング、計画等は全部まかせつたりにして次の授業が始まるまでりつこちやんの話で盛り上がつた。そして、チャイムがなつて緑川が戻つて行き、先生が来るまでのほんのちょっとの間になんと、千華が話しかけてきた。

「ねえ、義人君」

「ん、な、何だ」

「……アイドルの追つかけとか気持ち悪いよ」

「…………」

「これはぐさつときた。いや、それ以上だ。プロが小学生に対しても野球ならピッチャー返し、剣道なら突き、柔道なら掴まず放り投げるみたいなそんな感じだ。

次の授業は放心状態で受けた。りつこちやんのことを全否定されたような、そして俺の事を全否定されたような絶望感。冗談抜きに

脳内をぶん殴られたような気持ちでそのまま昼休み、午後の授業へと移行。『ご飯も喉に通らなかつたりする。

「おい、大仁、大仁…」

「え、はい

「こここの問題を解いてみろ

「えーっと…」

「教科書が逆さまだぞ」

「え、あ…」

授業中あてられてもこんな反応。クラス中で軽く笑われて授業は普通に進む……でも、俺の心は午前中に千華に言われた言葉のところまで止まつていたりする。

放課後になつてある程度は回復したが、既に千華は教室にいなかつた。

「……はあ

「お困りのようだな

「ああ

「よし、じゃあもう少ししたら青木をこの教室に呼び出すからお前は男子トイレで待機しておいてくれ。携帯持つてきてるだろ?」

「ああ

吹き飛んだ男子トイレは未だに立ち入り禁止状態ではあるため、同じ階の男性職員用のトイレを使用可能である。

そこで待機すること三十分。俺の携帯が鳴りだした。

『お膳立ては全てしてやつた。後は勢いよく教室の後ろ扉を開けて床にある印一步手前で綺麗に止まれ……いいか、勢いを付けて行くんだぞ?』

「わかった

『この計画の一一番重要な部分だ。もう一度いうのはそれが大変必要な事だからだぞ……いいか、後ろの扉から勢いよくはいつて床に印があるところで止まるんだぞ』

「わかったよ

『じゃ、がんばれよ』

何故勢いよく入らなければいけないのかわからない、しかしまあ、必要なことなのだろう。千華に気がつかれない様に教室前までやつてくると勢いよく扉を開け、そのまま突っ込んだ。

「!?

千華は驚いたような顔をしている。そりや当然か。俺は緑川の言うとおり床にあつた印一步手前で止まろうとして、止まれなかつた。簡単に言うなら印のところに何か滑るような液体がまかれていたのだ。

「うわっ」

そのまま千華を押し倒して大変なことになった……いや、そんなことはどうでもいい。それより大変なことになつていいのは間違いない。

千華は俺の事を心の底から汚物でも見るかのような目で見ていたのだ。

「義人君、女の子なら誰でもいいんだね」

「ち、ちが……」

この状況で『違つんだ』でまかり通る事等不可能だらつ。同じようなイベントを体験してきた連中は俺の事を責めることなど出来ないはずである。

「最低つ、大嫌いっ」

金的にひざ蹴りされて悶える俺。千華は走つて教室から出て行つてしまつた。

「ありや、失敗だつたか

そして掃除用具入れから緑川が出てきた。正直、生まれて初めて他人に殺意を覚えたかもしれない。何を期待していたのかビデオ力メラが握られている。

「て、てめえ、よけいこじれちまつたじゃねえかつ」

「これで終わつたんなら手つ取り早かつたんだけどな。うまくいかないもんだな」

「お前、他人事だからつて……」

「おいおい、俺の方はとつておきがかかつてゐるんだよ。他人事じゃねえ。つーわけで、最後の仕上げだな」

「仕上げつて……」

「何、お前は家に帰つてデビュー当時の写真集を俺に渡す準備をしておくんだな」

緑川の言葉を聞きながら何とか内また氣味に立ち上がる。親父はよく女性に金的攻撃されていたそうだ……自慢するよつて言つているなんて今更ながらバカだと思う。

「じゃあまた明日な……しつかし、いい絵が撮れたもんだ」

あいつが男じやなかつたのなら間違いなく襲つて血を吸つていた事だろう。誰かにイライラをぶつけたいが、そんなことしたら大変なことになるだろうな。

お股が大変なことになつてないか確認する勇氣もなく、お茶を入れて一息ついていた。

「はあ……」

やつぱり素直に謝つて……それこそ、土下座しても許してもらうべきなんだろうか。でも、俺は別に悪いことしてないんだけどなあ。うーん、しかし、とりあえずは頭を下げてこの場を丸く收めたほうがいい気がする。うん、そうしよう。明日は朝一で千華の家の前で待機している事にしよう。

俺の中で堅い決意が出来上がつた時、携帯電話が鳴りだした。サブディスプレイを見てげんなりする。

「……緑川か」

嫌な予感がするものの、無視するわけにもいかないだろ？

「もしもし」

『ふふふ、あははは、あーははは』

急いで電話を切つた。いきなり三段可変式叫びをしてくるようなアホの友達なんていない。きつといたずら電話だつたか、俺の幻聴だ。

そして再び「ホール音。相手を確認したあとため息をついた。

「もしもし」

『何切つてるんだよ』

「そりや誰だつて切るだろ」

『ともかく、俺の勝ちだ。明田の朝ちゃんと持つてこよ。くくく
……じゃあな』

それだけ言つて電話は切れる。メールでよかつただり、別に。恨み事の一つでも言つてやるつかとリダイヤルしようかと思つた時にチャイムが鳴り響いた。

「あ、はーー」

そういうえば管理人のおばちゃんが来るとか何とか言つてたつけるとかく出たほうがよさそうだな。

いい感じに錆びの音を響かせて扉が聞く。そこには肩で息をしている千華の姿があった。

「ち、千華……」

「はあ……はあ、『じ、じめんね何だかあたし、すつじぐ勘違いしてたみたいでさ……」

「そ、そつか……どつあえずあがれよ。お茶ぐらになら出すからい』

「ありがと」

千華を部屋に通してお茶を出す。それを一気に飲み干して一息ついたようだつた。肩を露出させた服装の為、汗ばんだ肩、首筋の方へとついつい視線がいつてしまつ。

「あのや」

「え」

慌てて千華の顔を見る。すると千華は本当に恥ずかしそうだった。
「勘違いしちゃって……」「めんね、義人君があんなことするわけないもんね」

「え、ああ」

「由香からちゃんと話聞いたからさ。本当、変な事を頼んだみたいで……それに、学校で義人君にひどいこと言っちゃったし」「もつ気にしてねえよ」

本当は滅茶苦茶気にしてるけどな。男の見栄つてもんだよ。

「そつか、よかつた……」

「あ、ああ。よかつたぜ」

何だか嫌な空気だ。嫌つて言つた、居づらい雰囲気。

「あたしね、なんだか急に義人君が遠い存在だったのを知った気分になっちゃつてどうすればいいのか全然わからなくなつたんだ」「は？」

千華は顔を伏せた。透明な液体が床に墜ちて行くのがちらつと見えて俺の心が不安定になつて行くのを感じた。

「言葉じや説明じづらいかな。あたし、国語苦手じやないけど言葉に出来ない。うん、義人君は吸血鬼だけど、すごく近くにいて本当に親友だった。そうだったけど、急に義人君が何考えているのかわからなくなつて……そこにアイドルの話で盛り上がるとか本当に信じられなくて……」

千華はゆつくりと顔を上げる。悲壮さはなかつた、怒つてはいるようでもなくて、笑つていた。

「やつぱり、義人君が悪いつ」

「ええつ？ わけわかんねえよつ」

「女の子を勘違いさせちゃつたんだから義人君が悪いつ」

「……なんだよそれ」

「理屈だ……と、思いつつも丸く収まつたようではつとする。ため息をついた俺の右手を持つて自分の胸の中央へとくつつけた。鋼の心臓と誉れだかき俺の心臓は徐々に鼓動が速くなる。

「あたし、勘違いしちゃったから……たとえ義人君が吸血鬼を見つけて事件を解決していなくなっちゃうとしても全力で協力するよ。うん、何かあつたらあたしに相談してね。絶対だよ？」

「お、おう……」

他人がいなくて本当に良かつた。こんなところ見られたら恥ずかしくてどうにかなつちまうよ。さつきから心臓はばくばく鳴り響いているし、何か病気になつちまつたんじゃなかろうか？

いつもよりテンションの高い千華は『このまま居たら義人君をどうにかしちゃいそうだから帰るよ』といつて早々に帰つて行つた。改めてやる気が出てきた気がする。どんな事があつてもこの町に巣食う吸血鬼がいるのなら絶対に、締め出してやろうと俺は心に誓つたのだった。

「義人、本をよこせ」

「ほらよ」

「珍しいな……お前がこつもお宝をほいほい渡すとはよ。渋るかと思つたぜ」

「ああ、俺にはもう要らないんだよ。つっこちやんはもう過去の人だ」

「そつか、そりゃあ……よかつたな」

「ああ」

「ま、俺の計画は正しかつたわけだが……この本を貸してやひつ」

「いいのかよ？」

「ああ、お前もわかる奴だからな。いいものはちやんと知つておいた方がいい」

緑川から借りた本は俺が読む前に千華がにこにこしながら燃やしてしまつた。この貴重な本への多額の出費と、頬に残る強烈な手形

が事件のまとめとなつた。

第一一十六話・み・悪者

第一一十六話

世界征服をたくらむ悪の組織『じんじやつべーる』。戦闘員たちは食卓にのぼる食塩を砂糖に変えると言つた悪逆非道の限りをつくしていた。

怪人は戦闘員たちにどんどん指示を送り続ける。

「さあ、さあ、世界を混沌の渦に陥れるのだ」

「までーー」

「この世はもう破滅だ……誰もがそう思つていた時に人類存亡の一筋の光が道を照らす。

「貴様のような変な名前の悪の組織なんぞ不要だ。世界は我ら、『日本籠手臭愛好会』がもらいうける」

第一の世界征服をたくらむ組織が出てきたのだった。

「までまでーー……」

そして、その後も我こそは霸道を喰えるものなり、といった感じでたくさんの悪の組織が出てきたのだった。

結果はいわずもがな……最終的には潰しあつて世界は平和になつたのだった。

「先生、どうかこのお金で一つお願ひします……」

「おうおひ、まかせえまかせえ」

まあ、小悪党の方は破滅したりはしない。

今ではあまり話さなくなつた青木千華から借りた本はどうも俺には合わないようだつた。さつぱり面白さが伝わつてこないだらう……きっと、この粗筋を見たところで誰も続きを読むとは思わないし、作者の努力が微塵も感じられないのだ。とりあえず書きました……一度あつてぶん殴つてやりたいな。

そろそろ須黒との待ち合わせの時間だ。しかし、住所通りの場所に来たものの廃工場だ。まあ、この廃工場の事はとっくに調査済みで吸血鬼が来た痕跡は見当たらなかつたし、玉富先生だつてこの場所に来て独自に調べていたそうだから大丈夫だらう。

ではなぜ須黒はこんな人目につきそうにない場所に俺を呼んだのだろうか。須黒自体が吸血鬼で事件を起こしていったと考えるべきか……いや、それはないか。それが違うと言つのなら何が理由としてあげられるだらう。

「うん、駄目だな」

これ以上は特に思い浮かばない。本命で俺の正体がばれたつてやつかもしれないな。

「……義人君」

「お、やつときたか……」

そこにいたのは須黒美咲ではなく、僕らのアイドル真白りつこちやんだった。なんで間違えてしまつたんだろうか。須黒の声になんとなーく（須黒は慣れないと聞いていて不安になるような声がするのだ）似ていいとは思つたけど違うしなあ。

「お、おお…生りつこちゃんだ」

まさか須黒はりつこちゃんと知り合い…いや、それより仲のいい友達や親友、はたまた親戚だつたりするのかもしれない。いや、今は須黒のことなんてどうでもいい。

「握手してください、サインください、俺と一緒に[写真]で[写つてください」

直角のお辞儀、そしてそれから徐々に頭を下げて行き懇願。もしも往来でりつこちゃんが靴を舐めると言つても俺はそれを断る術を知らないんだ。

ちよつとやばい目つきをしていいあるひつ俺を見てりつこちゃんは若干引いているようだつた。

「え、えーっと、本当に氣が付いてないのかな？」

「何が？」

「えーっと、ほら」

りつこちやんの代名詞でもあるパイナップル頭を止めている紐が解き放たれた。豊富な髪の毛はそのまま落ちて行き……そこにいたのは学校で『白いワンピが怖いくらい似合つ少女ナンバーワン』の須黒美咲だった。

「あれ、りつこちやんが消えたぞ……どこに行つたやつたんだ……須黒、知らないか？」

「…………はあ」

「おーい、りつこちやーん……は、もしかしてりつこちやんは瞬間移動の持ち主で須黒と素早く入れ変わったとか……はたまた異次元空間に逃亡」……

少し錯乱し始めた俺の頬に鋭い張り手が飛んできた。

「いたつ、何するんだよ」

「……落ち着いてよく聞いてよ」

「なんだよ」

「……私はね、真白りつこなの」

実は世界に滅亡の危機が迫つてます。あ、ちなみにそれは明日の早朝なんですよしづ。そう言われるよつもすこく驚いた気がした。

「はは、何を冗談を……」

「じゃあ黙つて座つてて」

「？」

今から何をするんだろうかと俺はその場に正座してしまつた。少し汚れてしまふがしようがない。

須黒はおもむろにマイクを取り出すと歌い始めた。

「「」、この曲は……」

りつこちやんがデビュー当時に一度だけ歌つたものだつた。最近ファンになつたよつなにわかが知つていいよつなものではない、何せ路上で偶然歌つたものだからな。

「……」それで信用してもらえたかな

「つーむ……まさか須黒が熱烈なりつこちやんファンだったとは……」

「……駄目だね、全然信用してくれない……」

須黒は何やら困っているようだ。何を困っているのか知らない……知らないけど、須黒とりつこちゃんの話で盛り上がりそうだと言う事はわかっている。

再び須黒は髪の毛をまとめるとつこちゃんが出てきた。

「あ、りつこちゃん」

「……大仁義人君つ

「はいっ」

「私は須黒美咲なのつ。わかつた？」

「わかりました！」

「本当にわかつたのかなあ……」

再び須黒に戻る。

「……私がりつこだつて認めてくれた？」

「そりやもう、りつこちゃんに言われたたら頷くしかないからな。まさか須黒がりつこちゃんだつたとは驚きだ」

俺の嬉々とした言葉に須黒は悲しそうにため息をついたのだった。
「……逆だよ、真白りつこが須黒美咲だつたの。親が無理やりやつて、それが大当たりするとは思わなくて……」

「そーなのか

一呼吸置いて須黒は口を開いた。

「……幻滅したでしょ？ 直信していたアイドルがちよつと根が暗い知り合いの女の子で……」

「ちよつと？ あ、いや、その事は今はいいや。

「いや別に幻滅なんとしてねえよ」

「……嘘、本当は『うわあ、須黒がりつこちゃんかあ……』つて思つてるでしょ」

顔を真っ赤にして今にも泣きだしそうだし、髪の毛の間から怒りと悲しみの光が俺を見ていた。うん、凄むと普通に怖い女の子だな。
「そんな事思つてねえ、逆によかつたと思つてゐよ」
「……わからない。なんでそう思うの？」「

「そりや～…………」

「ここはきっと重要な局面だ。そこに違いない。変なことと言つたり茶化したりしたらきっと須黒の口から呪いビーム的なものが出てきて後日俺は死体となつて見つかる事だらう。そして俺は吸血鬼の幽靈として新たな物語の主人公になるに違いない。絶対に生き残らなくてはいけないのだ。」

しかし、何か気の利く言葉は思いつかなかつた。

「じゃあどうすればいいのか…答えは簡単だ。すばり、話をすりかえるのだ。突拍子もなくいきなり別の話に変えるのではなくゆっくりと変えねばならない。あわよくば途中でいい言葉を思いついてこの難局を乗り切る事が出来るかも知れない。」

「まず、第一に…」

「第一に…何?」

「須黒が俺に何故、自分がりつこひやんであることを打ち明けたのか…それを教えてくれ」

「それは…」

「よし、これで十秒ぐらい稼げるはずだ。」

「…だって、義人君には一度みられちゃつてるし」

「みられた?」

「…本当に気が付いてないの?」

「ああ、俺は須黒がりつこひやんに変身する場面なんて見たことないぞ? それでこの秘密を知られたくないから…とかも出来なかつたし」

「えつと、ほら、『ンサー』の田中富先生と私が話しているところを見たでしょ?」

「ん、ああ、そういうやうづか」

つまり俺はあの時に須黒がりつこちゃんであることを知つていれば須黒に対して絶対的な力を有していたのである。

「…そのあと義人君に話をしたんだけどなんだか勘違いしてゐたいだつたし、気が付いてなかつたようだから…なんだか無性にイライラしちゃつてばらしたくなつたの」

「へえ、それが理由なのか。でもよ、俺に言つたらその秘密をばらされるとか思わなかつたのか？」

ちなみに、俺が緑川等の秘密を握つた場合は脅迫するに決まつてゐる。

「だつて、私と友達になつた時に『友達が少ない』つて言つてたでしょ？」

「あ～どうだつたかな」

記憶にございません。俺の行動をもう一度転校してきたところからやり直したいもんだが、面倒だからバスだ。そんな小さな出来事はどうでもいい。

しかし、俺にとつて小さい事でも須黒にとつてはとても重要な事のようだつた。

「…そつか、もう覚えてないんだ…」

見るからに落胆したような表情だつた。

「あ、えーとどだな、放課後は大体須黒と一緒にだつたし友達は今でも少ないし…色々あつてすぐに忘れるような性格なんだよ」

「…そうなの？」

「そうそう、須黒だつて忘れることがあるだろ」

「私は…忘れないもん」

「ないない、それはない。じゃあ俺がりつこちゃんのコンサートに誘つた時の言葉は何だよ」

「…軽薄そうな笑みで『この前緑川から交換条件でもらつたんだよ。二枚あるから一緒にいかないか』つて言つてきた。てつくり他の女子に頼んで駄目だつたから私に回つてきたのかなつて調べたけど、私が一番最初で最後だつたのが印象深くて残つてゐる

「そ、そ.ua…」

「本当は…行きたかつたんだよ?」

何だろ?、すごく悪い事をしてしまった氣がする。しかし、本当に一字一句間違いなくそう言つたんだろうか?確認しなければいけない俺でもよくわからないな。あの時は確かちょっとエッチな本を読んでいた氣もする。

「まあ…須黒の記憶力がいいのはよくわかつたよ。うん、俺が悪かつたから許してくれ」

えへへと笑つて「まかしてみた。

「駄目」

これが通じるのはすつごく可愛い女の子が使つた時か、子供が使つた時ぐらいだろ。これで何とかなるつて思つていたから後が無い、一つしかやつてないが万策尽きた。

「…私の事、どれくらいわかる?」

「わかるつて…どういう事だよ」

「好きな食べ物とか、色とか、そんな簡単な事」

「いや、あんまり一緒に弁当とか食べたことないし、色はどつせ黒だろうし…」

「私は義人君の好き食べ物とか嫌いな物、嘘ついた時の仕草とかわかる」

「ほえ、そんなことまでわかるのかよ」

「うん、それに…たまに私の事を義人君が怖い顔で見てるつてことも知つてるよ」

怖い顔…つまりは俺の腹が減つてingの頃だろ。輸血パックみたいなもの(献血するときみるだろ?血を入れる為の奴ね)を定期的に飲んでるからな。あれはまずいがとりあえず飢えをしのぐ事が出来るからいいもんだ。まあ、同じ部活だから隙をついて噛みつこうとか思つたことも何度かはある、あるけど…やつたことはない。「義人君なんでしょ?」

「え?」

「義人君が……吸血事件の犯人なんでしょう？」

前みたいに無表情。それが怖かつた。

「でも、私は……それでも構わない」

「いや、ちょっと待ってくれよ。俺は犯人じゃねえよ」

「ううん、いいんだ。言い訳しなくても……義人君が犯人でも、いい。私が義人君にりつこだつたって事を打ち明けたのはちょっと期待してたからなんだよ」

「期待だつて？」

「うん、とても大切な事を言つたんだから義人君も秘密にしている事を教えてくれるかもしけないつて……でも、教えてくれなかつたよね」

そりやそうだ。言つたところで信じてもらえないだろうからな。

「あのな、須黒……」

「用事があるから、またね」

「あ、須黒っ」

追いかけなくちゃいけないんだけど……何だか追いかけたら叫び声をあげて大変な目に会いそうだった。話をうまくすりかえられたようだつたけど、さらに面倒なことになつた気もする。

第一一十七話…ち…吸血鬼、準備する

第一一十七話

吸血鬼を仕留める為にはどうすればいいのか…。そりや何度も何度もめつた切りにしていれば多分死ぬんだろうが出来れば手つ取り早い奴がいいんだろうな。これがまあ、確立されていないと言つたほうがいいだろう。もちろん、昼間のうちに太陽の光を直接当てさせればいいわけなんだが…知つての通り、日焼け止めなどでそれらが通用しない吸血鬼もいるわけだ。銀の弾丸が通用すればいいんだけど、日本じや銃はちょっと手に入れづらいからな。

やつぱり、俺が吸血鬼を見つけた場合は説得するしか方法が無いんだろうな。

放課後、校門前でぼーっと千華を待つていたら一人の老人が目に移つた。校庭側から場外ホームランのボールが飛んできていた。一直線に爺さんを狙つており、偶然にしてはあまりにも出来すぎているような角度で後頭部に当たりそうになつた。

「え」

下手したら爺さんを昇天させたかもしない白球は誰もいないコンクリに当たつてちょっと撥ねただけだつた。爺さんの姿は数メートル程移動していた。実際、目にもとまらぬ速さで移動したのは確認できただけど…あんなの人間が出来ることじやがない。

「……血の匂いもするなあ」

何かの薬で血のにおいを隠しているようで、その不快なにおいは胸糞の悪くなるようなものだつた。

「ごめーん、待つた?」

久しぶりにシリアルス満々の顔して考えていたところに元気よく千華がやつてきた。

「ん、いや…」

「どしたの?元気ないけど」

「吸血鬼っぽい人物を見つけたんだよ」

「へえ、じゃあその人が犯人かな?」

「どうだろうな……確証が無いって言うか……人間にまぎれて生活しているだけの普通の吸血鬼かもしれないし……」

俺がそう言うと千華は驚いたような顔をしていた。

「どうかしたのか」

「あのさあ、もしかして……義人君つてばこの町に住んでいる吸血鬼のデータとか持つてないの?」

「持つてねえよ」

「じゃあ誰が犯人かってわからないんじゃないの?容疑者っぽい吸血鬼がいたら成敗するつもりだったとか?」

その言葉に俺は当然首を振る。

「俺がここに派遣されたっていう事は現地にNKKに所属している吸血鬼がいなってことだろうから住んでいる人数は零だろうよ」「じゃあさつき吸血鬼かもしれないって言つた人は後から引っ越してきたってことなのかなあ?」

「うーん……一度確認したほうがよさそうだな。というわけで、俺は帰るよ」

「あ、あたしも義人君の家に行くよ」

「なんで」

「だつてそりゃあ相棒だもん」

えへへーって笑つているとは実に余裕だ。さつきの老人が吸血鬼なら……勝てる見込みはない。

無碍に追いかけす事も出来ないのでいつものように一人で話しながら帰つた。いつもと違つのは直接俺の部屋に千華がやつてきた事である。

「で、何か特別な通信機みたいなもので情報を本部から受け取るの?」

「そんな大層なものはねえよ。携帯で事足りる」

「なんだ……がっかり」

「そう言われてもな……」

千華には「コーヒーを出して親父に電話することにした。

「あ～もしもし親父?」

『どうした?』

「いや、今俺の住んでいるところ……つていうか、最近は事件も起
こつてないんだけどこの辺りに吸血鬼とか住んでたっけ?」

『ちょっと待ってる……』

「コーヒーをあつとという間に飲み干した千華が俺の方を見ていた。
何かを期待しているようだ。しかし、それが何かはわからない。

「ねえねえ、義人君が所属している組織のトップって義人君のお父
さんなんだよね?」

「ああ、そうだよ」

「じゃあ義人君ってボンボンって事だよねえ」

「いや、そうでもないな……そこらの家と変わらねえっていうか
中流程度じゃねえかとおもう」

「ふーん」

『あつたぞ……えーと、今のところその地域に吸血鬼はない。一昨日
のデータが出てるからな。お前以外はNKKに所属している吸血
鬼はないって事になる』

「わかった、じゃあ今後も探してみる」

『ああ、義人。ちょっと待ちなさい』

珍しく親父から引きとめられた。

「ん、何だよ?」

『そこにいる女の子と代わりなさい』

とりあえず女の子と知り合いになろうとするのが俺の親父だ。別
に直接手を出すわけじゃない……人は一人じゃ生きられないって
言うそれと同じで誰かと関係している。言い方は悪いけど不細工の
知り合いが全員不細工と言うわけではない為にその中に好みの血を
持つ人間が含まれている可能性があるからな。

俺と電話を代わった千華はやらしきりに頷いていた。徐々に目

をキラキラさせていよいよつで……途中からまちよつと照れてこるようだつた。

電話を切つて俺に手渡す千華に尋ねてみる。

「千華に何話してたんだ?」

「教えない、秘密の話だよ」

「秘密つて……」

「ともかく、義人君のお父さんがいい人みたいでよかつたよ」

「見た目はまるでフランケンシュタインの怪物みたいだけだ」

「えー、見た目なんて関係ないよ。そうなつたら義人君だつて吸血鬼っぽくないし……」

「……」

どうせ千華の頭の中には黒地で裏地が赤いマントの線の細い奴がワイングラス片手に笑つてゐるんだろうけど、日本の吸血鬼はそんなもんじゃねえよ。

まあ、イメージするのは難しいな。所詮イメージに準じるような格好をしないとなかなか吸血鬼つて認めてもらえないところがあるからな。

「俺も普段からトマトジュースをがぶのみして吸血鬼のイメージ定着を狙おうかな」

「え? 義人君つて正体隠していいるんじゃなかつたつけ?」

「そつだつたな」

「そつだよね、今頃正体ばれていたら正義の味方に即スカウトされていたよ」

「どつちかといつと吸血鬼は悪の組織っぽいイメージがあるけどな

……ま、いいよ

用事が無いのなら帰つてくれ……とは言えないので無難なところでテレビをつけておいた。

「ちょっと、トイレ行つて来る」

「別に宣言しなくてもいいよ。それに『テリカシー』が無いから『お花を摘みに行つて参ります』とか言えればいいと思つ」

「あー、はいはい、大きい方を力みまくつてきますわ」

トイレに入つて辺りを見渡す。なんだか誰かに見られている感じがしたんだけど……男一人の住居に用事のある奴なんていないだろうな。

しつかし、人間が腹筋を鍛える理由つて言うのはこれだけだつて最近思うようになつて來たぜ。腹筋とか普段の生活でトイレぐらいしか使わないからな。腕の力は重い物をもつとき（例・箸）に使うし、足の筋力は食い逃げに使用するつて言う人もいるだろう。後は坂道、ダツシユとかか。

用事を済ませて：ああ、もちろん、ゆつくりしたから大丈夫だ。あんまり力を入れすぎると切れるとかなんとか親父が言つていたからな。手を洗つてリビングへと戻るとテーブルの上に肌色多めの本が、俺の部屋にきつちり隠されていた本が、蛍光灯の光に照らされていた。

「これ、何？」

「これ、何つて…」

いや、まさか家探しされるなんて思つてなかつた（思つていたから隠していたんだが甘かつたな）わけではないんだけど……なんでエロ本を引っ張り出されてきたんでしょうか。

「この前もこーんな本を読んでたんだよね」

「いや、あれはまだ読んでないぞ。読む前に千華に処分されちゃつたし」

「本つ当、義人君つてばこの町に何しに來たの？エッチな本を見る為に來たの？」

「ち、違うぞ。ちゃんと吸血鬼を捕らえるか説得するかのどちらかをする為だ」

「じゃあ要らないよね？」

「いや、それは…」

「しかも、『経費分、吸血鬼に関する本』って書いてるじゃない」

「……」

これはいいわけ出来ないな。報告するときは『件の吸血鬼が狙っている女性の参考書』だと言おうと考えていたりする。もちろん、その時には殆ど廃棄するつもりだった。

「あたしが処分しておくから」

「う、うう…お願いします」

「はい、じゃあこれ焼却する本の代わり」

そういうて手渡されたのは(というか、本は燃やすつもりなのね)二つ折りにされた何かだった。それを二つ折りから戻すと胸につけるあれだった。

「ぶ、ブライジャーかよ」

「そ、そうだよ。あたしのだから存分に使つていいよ

「使つていいって……」

嬉しいような、つてそういう問題じゃない。

「俺にはこんな変な趣味はねえよつ。ほ、ほら、返す」

若干後ろ髪を引かれるような感じがしないでもない、しかし、こんな趣味があつたとか学校に広まつたら大変なことになる。

「え、ええ? だつて緑川君が『義人は変態的な趣味だからね、この前も女子生徒の下着を盗んでいたよ』つて言つてたよ」

「あいつの言う事は嘘つぱちだ。適当に言つたんだよ」

「でも、緑川君のアドバイスでこの本の隠し場所わかつたんだよ?」

「いや、それは……関係ないから」

意外と大きかつた気がするブラ……というか、渡したと言う事は今つけてないんじゃ……いやいや、変なことは考えちゃいけない。

「ん?」

ふと、窓の外を見ると校門前にいた爺が張り付いていた。その目は獲物を求めるような目で視線の先にいるのは千華。

老人は舌なめずりをして満足そうに千華、そして俺を眺めてから姿を消した。

「ど、どうしたの? そんなに怖い目で外を睨んで……」

「千華、お前の家に俺を一日でいいから泊めてくれないか?」

「え、い、いきなりビーフしたの？別にいいんだわ」

「そつか」

「じゃあこつ泊まりに来るの？」

「今日だ」

「え」

「大丈夫、夕飯とかはこつちでちゃんと準備するから
さつきトイレでの違和感は爺に見られていたからだろうか……と
もかく、不審者を久しぶりに見つけたのだからそいつが千華を襲う
可能性もあるだろう。

今回の事件を起こした相手であると言つ事を祈りつつ、そして俺
が問題なく相手を説得、または仕留められるよう準備をすることに
した。

第一十七話・ち・吸血鬼、準備する（後書き）

奇数話ラスト（プロトタイプ）：「血を飲むためのパックが不注意で破れてしまう。血を手に入れるため千華とともに病院へと忍びこむとそこには別の吸血鬼が潜んでいた：義人はそれを追うが、血を飲んでいたためなのか、はたまた弱いからか吸血鬼に逆にやられ絶体絶命のピンチに陥る。一撃から救つたのは千華で、彼女は致命傷を負い、自分の血を飲むように義人に伝える。義人は血を飲み、吸血鬼を見事打ち倒すのであつた。徐々に冷たくなつていく千華をどうすればいいのかわからない義人は彼女を吸血鬼にすべきかどうか悩むのだった。」といつた感じですね。うん、なんでぐだぐだな方になってしまったのかわかりませんが次回で奇数編終わりですかね。

第二十八話・み・吸血鬼

第二十八話

現代によみがえった吸血鬼を追い詰めた博士。彼は最終的に吸血鬼の血液から作り出された薬を吸血鬼に打ち込み、息の根を止めることに成功したのだつた。

「くくく、これで全世界の吸血鬼を根絶やしにする事が可能なのだな」

顔をにやつかせ、液状になつた元吸血鬼を足蹴にして博士は何処かへ消えて行つた。

「んで、先生はこの薬とやらを作るつもりなんですか？」

須黒のいない部活動。当然、部員は一人中一人の俺だけだ。あとは先生が珍しくいる。どうも、アジトを突き止めたらしい。

「そうよ」

「そうよつて、先生の持つてきた本は創作物ですよ。うまく作れるつてわけじや…それに、出来たとしても実際に効くかどうかどうやつて試すんですか」

「簡単よ。大仁君に打ち込めばすぐに結果はわかるわ。試作段階の物から徐々に打ち込んで行つて一番効果が高かつたものを改良、そして実戦に投入するから問題はないわ」

「……」

げに恐ろしきかな、この人は俺の事を実験台とマジで思つているようだ。

「そんな汚い顔しなくても大丈夫よ。これは冗談だから…本みたいに液状になつたりしないから」

「ほつ…じゃあどうやって効果を確かめるんですか?」

「あら、そんなに死にたいの？」

「死にたくないんですけど吸血鬼を倒せないなら意味がないかなつて思つただけです」

先生が準備している機械は注射器などだ。後は試験管とかそちら辺の理科室…主に生物室にあるようなものばかりである。異色なものとしたら弾丸と拳銃だった。

「詳しく述べられないけど、大仁君の血から数種類の薬を既に作つてるわ」

「え？ もうあるんですか…」

「ええ、試してみたって言うのなら撃つてあげるけど…」

右手で銃の形を作つて俺の頭を撃ち抜くような仕草をする。本当、この人を相手にしなくてよかつたと思つてゐる。

「遠慮しておきます……出来てゐるのならなんで道具の準備していゐんですか」

「大仁君から血を採つてそれに薬を使うのよ」

「血に何か異変が起つたら成功つて事ですね」

「いや、失敗よ」

「え？」

「この薬がそれこそ吸血鬼の全てを滅ぼせるというのなら頭のおかしくなつた連中が絶対に欲しがるわ。もし、出回つちゃつたら全世界の吸血鬼はあつという間に死滅するもの」

まあ、そうだろうなあ。吸血鬼を倒すために作ったものだ。吸血鬼を滅ぼしたい連中にとつては喉から手が出るほど必要なものだろう。

「でもね、安心していいわ」

「え？ なんですか？ これつて相当やばい代物なんでしょう？」

「一部の吸血鬼にとつてはね……これは人間が恐怖を感じた時の血をすすつた者だけに死を与えるものなのよ」

「つまり……？」

「つまり、良い、悪い吸血鬼の定義なんて曖昧なんだけど今回の吸

血鬼は人を襲つて血を吸つてゐる。もちろん、血を吸うときには人が悦に入るような分泌液を出していたりするけど多少なりとも吸つているでしようから効果が期待できるわ。もちろん、あなたがこれまで生きてきた中で一度でも恐怖におののいた人間から血を吸つていると言つのなら……あなたの血は一瞬にして蒸発するわ

恐ろしい話である。

「……多分、大丈夫です。生まれて十七年ぐらい経つてますけど人から直接血を吸つた回数はちゃんと覚えていりますし、襲つた事はありませんから」

「そう、意外と若いのね」

「先生はどうなんですか？」

「……まず、撃ちこまれたら瞬時にミイラになるでしょうね」

「そうとう悪い事をして生きてきたのだろう……しょうがない、長く生き過ぎた吸血鬼は精神のどこかがおかしくなつてしまつとか聞いた事があるからな。」

「あ、何か失礼な事を考えたわね？ 言つておくけど、たとえ私が人間だつたとしても人を傷つけて悦ぶような性格だと思つわよ」

「先生、仮にも生徒ですからそういうことは言わないで下さい」

「……そうね」

先生は俺から採血した後、さつさと液体を垂らしていた。垂らされても血は一切変化が無い。

「ほら、ね？」

「よ、よかつた……」

「で、これが私の血となると……」

シャーレの上に自分の指から血を流しこむ。そして、液体を注ぐと一瞬にして蒸発し、そこに残つたのはかすかな血痕だけだつた。

「お、恐ろしい代物ですね」

「そうね……今回の相手はこうなる事を望んでいるのよ

「え？」

いまいち意味がわからなかつた。説明する気もないようで道具を

片づけた後、先生は携帯電話を差し出した。

「今晚、七時前に校門前に集合」

「はあ……で、この携帯電話は何ですか」

「今から須黒さんに電話をかけるのよ」

「何故ですか」

「立ち会つてもひつゝ為。約束したからよ」

「約束つて……」

電話帳に登録されていた須黒の名前を押す。するとすぐにホール
音に変わった。

「女の子同士の秘密よ、男の子には教えないわ」

はつ、女の子だつてわ。

そんな事を思つた俺の耳、すぐ隣を何かすゞく危ないものが通過
していつた。

「試し撃ちよ」

「……そ、そんな物騒なもんを撃たないでトセよ。当たつたら
どうするんですかつ」

「当たつても消えはしないんだからいいじゃな」

よかあない。死ななかつたとしても痛い思いをするのは間違いな
い。

『もしもし、先生?』

「あー、俺だ。先生からの伝言……何時でしたっけ」

「今晚の七時よ」

「今晚の七時、学校前に集合してくれだつてさ」

『…………わかつた』

俺にそれだけ言つと切ろうとした雰囲気が伝わつてくる。何か言
つたほうがよせやつだつたのでござ口こじよつとしたところで電話
を取り上げられた。

「もしもし、えつと……わ、帰つていいわよ」

『え』

「今日の活動はこれでおしまい。解散よ。今度は身体に撃ちこじよ

ほしこつていのうのなら残つていてもいいけどね
そんな事を言われたら帰らなくてはいけない。

「失礼しまーす」

先生が須黒と何を話そつといしているのか気になる……眞になる
が、黙つて帰らないと風穴を開けられる可能性が高いのでやめてお
いた。

ま、後で須黒に聞けばいいだけだからな。ところで、俺つてこの
事件が終わつたらどうなるんだろうな。この町にこのまま居るのか、
それとも前の町に戻るのか……どちらなんだろうか。

第二十九話・ち・終わり

第二十九話

過去一度、血を一切吸わなかつた吸血鬼がいたらしい。それつて吸血鬼なのか?と言わればなんとも言えないもんだけど身体調査によるとちゃんとした吸血鬼だつたそつだ。血を吸わない吸血鬼がどうなるか…答えは簡単、本来の吸血鬼の寿命よりはるかに劣る年齢で衰弱、死んでしまう。ただまあ、吸血鬼の寿命なんて本人が生きようと言つ意思があれば何とかなりそうなもんだけどな(長い年月の間で心変わりし、死を望む吸血鬼もいるそつだ)、その吸血鬼は八十四歳で天に召された。

俺のお泊まりを青木家の面々は喜んでくれた。特に、妹の由香ちゃんが一番喜んでいるよつにも見えた。

「あ、あの、今日してくれるんですね」

以前こんな事を言われたら千華からどんな目にあわされているか想像した自分がいたことだらう。

「由香、駄目よ。義人君はそんなことしないんだから」

「え…でも吸血鬼は仲間を増やしたがつているつて義人さんとお友達の老吸血鬼に言われたもん」

「……由香ちゃん、詳しい事を教えてくれないかな?」

俺の推測が正しければあの老人から言われたのだろう。だとしたら、やはりあの吸血鬼を討たねばならない。吸血鬼の事は普通の人間に教えるべきものじやないのだ。

その理由の一つに迫害の歴史がある。みんながみんな吸血鬼を滅ぼしてしまえなんて思わないだろつが、少しの期間だけそう言つた事があつたらしい。ＮＫＫの古株は『あの頃は怖かつたよ、だつて十

字架逆さまに担いで追っかけられたんだからな』と語つてゐる。

「その老人は他に何を言つてゐたのかな」

「うーん、吸血鬼になつたらすごく楽しい人生が待つてゐるんだつて言わされました」

「そんなバカな…」

「ああ、それならあたしもそう思うなあ」

「千華まで何をバカな事を言つてるんだよ。人間を吸血鬼にするのは色々と面倒なんだぞ。由香ちゃんがさらにやる気になつてるじゃないか」

妹の教育によろしくないだらうに」

「だつて、義人君とか空飛べるし、すぐ強く強いしこれなら正義の味方になれるんだもん」

「確かに、空は飛べるし、すぐ強くなる。でも、日光が危険なものになるし、日中ねむくなつたり面倒なことになるんだぜ?」

「でも、義人君は日光平気じゃん」

「そりやまあ、日焼け止めを塗つてゐるからな」

「日中も眠つてないじゃん」

「それは慣れだな」

「じゃあ慣れれば……」

由香ちゃんが俺に首筋を見せるが俺は首を振つた。

「そうもうまくいかないんだよ。吸血鬼になつた時点から慣れないといけない。慣れた俺だつて一ヶ月に一回ぐらいは昼間に猛烈に眠くなつてその場で寝ちゃうぐらいだからな……」

「でも、私を吸血鬼にしたら義人さんが……世話をしてくれるんでしょう?」

そう、それが一番面倒な事なんだよ。人間を吸血鬼にすると吸血鬼が人間の世話をしなくてはいけないのだ。以前にも言つた書類等の世話から規則事項、吸血鬼になつてから何年の間は新たに吸血鬼にしてはいけないなどなど…自分の世話をらまともに見る事の出来ない人間が犬を飼つたらどうなるか想像はつくだろう。

「俺は嫌だね。由香ちゃんは人間のままの方がいいと思つぜ……」

「……ぶう」

「膨れても駄目だ」

不満そうに俺の方を見る由香ちゃん。面倒みるのが苦手な俺は絶対に人間を吸血鬼にしないだろうな。

「じゃああたしなら吸血鬼にしてくれるの？」

突如として飛んできた横やり。

「は？」

「だ、か、あ、あたしなら吸血鬼にしてくれるの？」

「なんで？まあ、千華の場合は『空を飛びたい』とか『正義の味方になりたい』とかそんなのばっかりだろ？」

「まあ、そうだけどさ、この前の学校事件で義人君の力になれたらなあつて思つたんだよ。す、ごくかっこよかつたもん」

「……はあ」

「あの事件、その老吸血鬼の人が起こしたって言つてましたよつてえ、本当かい？」

由香ちゃんはこつくり頷いた。

「うん、手引きしたのは自分だつて。獲物を横取りされたのが悔しかつたから滅茶苦茶にしようとしたつて言つてました。私が聞いたのはこれで全部です」

「獲物……？」

俺がこの町にやつてきて他の吸血鬼の獲物を奪い取つた事はない。大体支給された血で我慢していたからなあ。

横から俺の事をジト目で見てくる人物がいた。

「な、何だよ」

「義人君、この町の吸血鬼を捕まえるとかいいながら女の子襲つてたんだ？」

「お、襲つてねえよ。そりや俺だつてちゃんと生きのいい血を飲みたいけど我慢してパックの奴を飲んでいたんだからな」

「へえ、つて、冗談だよ。多分、あたしと最初に会つた時の吸血鬼

がそのおじいさんだつたんだよ

「……あ、そうか」

なるほど、吸血鬼が吸血鬼の邪魔をしたと言つのなら、そして、放課後一緒に登下校しているのなら獲物を盗られたと思つだらうな。

「でも、今更あたしを狙つてくるなんてどうしたんだろ」

「……古い考えの吸血鬼だらうからな。どうしても血が欲しかつたんだろ」

「え、あたしの血つてそんなにおいしいのかな？ ああ、若いからかうんうん、そう考へるとちよつとだけ嬉しいな」

俺としては千華の血なんて飲んだら熱血フルパワーになって頭がおかしくなるんぢやないかと思う。青虫だつてキャベツの葉を食べずに入参食べていれば色が変わるんだからそつなるだらうこ……まあ、吸血鬼がどうなるかは知らないけどな。

「ともかく、今日はそろそろ寝てくれ。俺は屋根にいるから

「え？ 一緒に寝ないの？」

「寝るわけないだろ」

しつかりと準備された三つの布団を指差される。

「寝ようよ」

「じゃ、行つて来る」

寝ようよーとこう声を無視して俺はさつと屋根まで登つた。こ

こなら吸血鬼が来ればすぐにでもわかる。

しかし、屋根の上には既に先客がいた。こんな時間帯に人さまの家の屋根に昇つているような奴に碌な奴はいない。

「……」

「ほつほつほ、若い頃の自分を見ているようじや」

月明かりに鋭い犬歯がきらりと光る。芸能人は歯が命つてCMそういうえば前にあつたなあ…。相手が吸血鬼なのは間違いないだらうから俺はさつそく説得コマンドを選んだ。

「質問があります」

「わしがお前さんの話に付き合つてやるのは五分間だけじやぞ

勝手な爺さんだ。ともかく、全く素性のわからない相手だから下手に断つたりしたら面倒だ。説得できるものも出来なくなっちゃう。

「あなたがこの町の吸血鬼事件の犯人ですか？」

「そうじゃ……と、言いたいところだがこの町で事件を起していった吸血鬼は別の吸血鬼によつて滅ぼされたわい」

「……本当ですか？」

「本当じゃ。この近くの高校、そこで息の根を止められたどこのか血痕しか残らんほどに滅茶苦茶にされたんじゃよ」

一見すると目の前の老人が嘘をついているようには見えなかつた。ただまあ、やっぱ怪しいので心の奥底から信用はしていない。

「じゃ、じゃああなたは何者ですか？」

「血に狂つて事件を起こしまくつた吸血鬼の相棒じゃよ。わしの寿命ももう少ない……ばあさんをやつた吸血鬼に仕返しをしたくて関係のないお前さんを襲おうと考えておつたんじゃ」

「とんでもねえ爺だ。」

「そろそろ時間じゃな」

「ちょ、ちょっと待つてください」

「そこに剣がある」

爺さんが指差す先には一振りの銀の剣が屋根に突き刺さつていた。月明かりを受け、眩く輝いている。

剣を握り、俺に切つ先を向ける。子供の頃はちやんぱらで遊んでいたもんだが……それはあくまでおもちゃであつて本物ではない。

「わしとこう吸血鬼をその身に恐怖で刻んでやるわい……」

先ほどまでの優しそうな爺さんはどこへやら……狂気に満ちた瞳はしつかりと俺を捉えて離さない。

「ま、待つてくださいってば。俺はあなたと争う気なんて……」

「別にわしはそれでも構わんよ。吸血鬼にもできなかつた人間の小娘なんぞにもはや用もない。それを決めるのはお前さん次第じゃ」

「……」

別に手元にいなくたつて吸血鬼がその気になれば屋根を貫いて下

で寝ている人間を一発で昇天させることぐらい簡単なことである。ともかく、爺さんの都合で由香ちゃんの事を吸血鬼にしたかったらしい。

「……なんで由香ちゃんの事を吸血鬼にしたかったんですか」「簡単じゃよ。さつきも言つた通り、わしの寿命はもうないと云つたほうがいい……わしどう存在を覚えておいてもらつ為の伴侶も吸血鬼に殺され、このままではわしはこの世界から存在しなくなってしまう」

死んだら……そうなるんだろうけどな。狂気に満ちた者が何を言つても理解できないし、理解しようとも思わない。

「お前さんにはわからんじゃね。長く生き過ぎた、考え方の違いかもしけん」

呆然と立ち尽くす俺に爺さんは一瞬だけ優しい笑みを見せた。

瞬きを終えた俺の瞳に映るのは狂気に満ちた爺さんだつた。彼は剣を構え、迷うことなく一步踏み出してくる。俺も慌てて剣を引っこ抜くとどりあえず構えてみた。一応、心得はあるんだけどな。

互いの剣が触れるか、触れないかの時に爺さんは大きく体を動かし、へたれな俺は後ずさり、体勢を勝手に崩した。

やられる……

そんな言葉が真つ先に頭に浮かぶ。次に浮かんでくる言葉は何故だか知らないが千華に対する謝罪の言葉だつた。

目をつぶることなく、せめて切りかかつてくる相手の顔を見続けようとしつかりと目を開けていた。老人の剣は俺のすぐわきへとそれ、屋根を貫いて爺さんはそこへと倒れ込む。

「……

爺さんの体は全く動かず、俺も動けなかつた。

俺は手に持っていた剣をへし折つて捨てた。再び爺さんの方を見るとさつきまであった身体はどこにもなく、服だけが残っていた。

「まさか素っ裸になつて逃げたとか……いや、ないか」

吸血鬼が寿命を迎えたらどうなるのか、俺はよく知らない。爺さんが死んでしまつたのか、それともどこかへ行つてしまつたのか定かではないけどこのまま屋根の上にいると言つのも変な話だらう。事实上、これで羽津吸血鬼事件は終わつたと言つ事になる。

「いまいち消化不良が否めない事件が終わり、二学期になった。

「とこゝうわけで、羽津吸血鬼事件は関係していた吸血鬼全てが死亡したと言つ結果になりましたとさ」

「そうか、こゝ苦労だつたな」

俺は一学期初日から学校をさぼつてこゝで理事である親父に報告していたりする。こゝ一週間、ひっきりなしにかかる千華からの電話を全部無視。俺は事件が終わつたと言つ事を手紙で送つただけだ。そして、夜逃げに近い引っ越しをしてこゝに帰つてきたのだ。

「アパートのおばちゃんにこゝちゃんと挨拶してきただらうな」

「そりやまあしたけどさ」

「そうか、後はお前の問題だからな。別にあちらの高校でもよかつたんだぞ」

まるでフランケンシュタインの怪物みたいな親父は顎を撫でている。

「いや、俺もあつちでよかつたんだけどさ、色々とあるんだよ、

「色々つて何だ? 女絡みか」

「違つ」

「ともかく、電話がかかつてきているのだからひやんと出であげる

のが紳士のたしなみだぞ」

にやにやしながらこちらの方を見てくれて。何か企んでいるん

だろうか。

「電話が終わつたらまたこいつに来てくれ。新しい事件が起つたからな」

「わかつたよ」

それだけ言つて退室することにした。親父の言つとおりやうそろ

電話に出たほうがいいかもしれない。

「……はあ」

怒られるだらうなあ、絶対に。ともかく、出てあやんと謝りつけかつてこなにのならそれが一番いい事なのだ。しかし、結局はかかつてきた。

「……もしもし?」

『もしもじじやないよ』

鼓膜をつんざくよくな声が襲つてくる。耳をふさごで逃げ出したくなつた。あの青空の向いづへ両手を広げて飛んでいきたい……。

『なんで電話無視するの?』

「いやー、ほら、説明するのが面倒つて言つか……それに由香りちゃんから吸血鬼にしてほしいとか言われたらかなわないからな」

『じゃあ、なんで転校してるの? いきなり一学期始まって転校しましたとかクラスのみんながポカーンとしてたよ』

今世紀最大のポカーンだよ、千華は吐き捨てるよつこやつ言つていたのだが、俺にはいまいちわからない。

「いや、もう無理だつて。俺もNKKの一員だからな。悲しい事だけど、また新しい事件があつたんだよ。ほら、俺つて正義の味方的な事やつてるからしようがないんだよ

苦し紛れの嘘だつたけど、千華に対しては絶対的な効果があるはずだ。

『そつか……』

電話の向いづからは納得していないけど諦めたような声が漏れて

くる。少しだけ心がいたんだけどじょうがない。

『じゃあ、手伝つよ』

「え？」

『あたし、義人君の相棒だよつ。だからあたしも手伝つよ』

これに対してもう切り返したらいのかわからなかつた。そんな時、俺の手から携帯電話を取り上げる人物が約一名、いた。

「あー、もしもし、千華ちゃん。実はまた新たにそつちに吸血鬼が現れてね。ああ、そうだ。またそつちの高校に転校することになるから義人の事をよろしく頼むよ」

「お、親父つ」

片田をつぶつて俺を笑つてゐる。似合わないんだよつ。

「ああ、そうだ。じゃあ、よろしく頼むよ」

勝手に電話を切つてしまつた。

「な、何してくれてるんだよつ」

「これは命令だ。今日中に支度をして、いや、後日荷物は送つてやろつ。すぐに飛んで行け。今回は協力者が既にいるからな。」こちらで下宿先を決めている

「もしかして……」

「そうだ」

約一時間後、俺は千華に会つて頬を思いつきりぶたれて抱きしめられた。

第一十九話・ち・終わり（後書き）

千華編終了です。短い間でしたが読んでくれた方々ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7582u/>

お人よしな吸血鬼

2011年10月8日03時21分発行